

# フローベールの政治思想

## —その書簡による分析的研究—

滝 澤 壽

### 序 論

その同時代は勿論、死後百年近くを経た今日に到るまで、フローベールに対する評価は、称賛者であれ、批判者であれ、「正鵠を射た一語」を追求し、ひたすら文学に仕え、精進した「苦行僧」、<sup>ル・モ・ジ・ユ・スト</sup>「クロワッセの隠者」というイメージにはほぼ一貫して懸かっていたと言ってよい。フランス古典主義の「芸術効用論」やその流れを汲んで依然として根強く見られる社会的傾向、いわゆる「文学の社会的使命論」に反対して、「芸術の自律」を、そしてその帰結として「芸術のための芸術」を標榜した後期ロマン派、高踏派及び写真主義が、文壇の主流を占めていたこの時期は、十八世紀啓蒙主義とその流れが端的に示す如く、一般的に政治に強い関心を有するフランス文化の伝統とは裏腹に、珍しく非政治的な時代であった。ゴーティエ、ルコント・ド・リール、そしてボードレールといった詩人達の親しい友であり、彼等と気質的にも共通のものを有していたフローベールも又、その芸術観に心からの共感を示し、かつ自らもそれを徹底して主張・実践していったことは周知の事実である。しかしながら彼が同時代の作家達に比して、より我々に訴えかけ、ある意味でより優れていると考えられる一つの大きな理由は、こうした時代思潮や文学的主義主張を超えて、その芸術創造の根底に、そして広く人間の運命そのものに不可避的に係わってくる社会的、政治的問題に寄せた関心、その真摯にして誠実な取り組みに存するように思われるのである。

こうした観点から、本論では従来余りにも等閑視されて来たフローベールの政治思想を、その時代背景・思想とも絡ませつつ、明らかにすることによって、思想家フローベールの一面とその特質を浮き彫りにし、ひいては作家フローベールの文学創造の秘密に、今までとは異った新たな角度から光を当てようとするものである。

ところで、フローベールには、直接政治を論じた書物というものは存在しない。そこで本論考では、こうした作業のために、専らその資料を書簡に求めている。それは、「作者は作品のなかで、神が宇宙におけるように、到る処に遍在しながら何処にも姿を現わさないようにしなくてはならない」<sup>(1)</sup>を文学的信条とする彼の諸作品にあっては、その思想体系を直ちに把握することは困難であり、結局推論によるの他は無い以上、より直接的に、いわば赤裸な形で、その思想を窺い知れる書簡が、最良の素材と考えたからである。しかしそれでもなお、「愚かしいのは、結論をつけようと望むことだ」<sup>(2)</sup>と一つの固定した立場を取ることをきっぱりと拒絶する絶対的懐疑主義者の書簡は、その私的な形式とも相俟って、自由奔放そのもの、矛盾と混乱に満ちた、極めて非組織的、即興的なものであり、他方当然時代の相違によって、同時に又同年代ではあっても、宛先によって、その見解も時には大きく時には微妙なニュアンスを以て変っていることは否めない。

こうした諸々の危険を念頭に置いた上で行なわんとするフローベールの政治思想に関する考察の後に、改めて小説を始めとするその諸作品に当ててみる時、それらは新たな姿を我々の前に現わすであろうし、とりわけ今日まで十全に理解されて来たとは言いがたく、ややともすれば低い評価を与えられ勝ちであった『感情教育』や唯一の劇作たる政治諷刺喜劇『候補者』等の作品の読み直しにもつながってくるものと考えられる。以上の意味に於いて、本論究はフローベール作品論のいわば一つの基礎的な研究ともなり得るであろう。

## 第一章 時代背景・思想並びに彼の基本的政治思想

フローベールの生きた時代(1821年～1880年)は、数度に及ぶ革命を挟んで王制、帝制そして共和制がめまぐるしく交代した、フランスの歴史上でも希に見る政治的、社会的激動の世紀であり、その政治思想も極めて錯綜、混沌とした時期であった。前世紀末の大革命と世紀初頭を飾るナポレオンの栄光と没落は、ようやく過去のものとなりつつあったとは言え、復古王制、七月革命、ルイ・フィリップの七月王制、二月革命、第二共和制、六月暴動、ルイ・ナポレオンのクーデタ、第二帝政、普仏戦争、パリ・コミューン、第三共和制、そして又正統王朝主義、オルレアン主義、ボナパルト主義、共和主義や民主主義、サン・シモン及びフーリエ主義、ルイ・ブラン、ブルードン等の社会主義、ブランキ、バルベス等の革命的社会主義、ジャコバン主義、バブーフ主義、バクナーニ的アナーキズム、更にはインターナショナル、かくの如く並べてくれば、この間の事情は明らかであろう。裏切られた革命と偽りの体制変革、そしてその下でも一貫して進行した産業革命の完了、帝国主義へと続く政治・経済状況の中での上昇期ブルジョアジーの支配権の確立、次第にそれと鋭く対立して来る階級としてのプロレタリアートの形成と台頭、こうした絶えざる政治的幻滅・社会不安のただ中で、フローベールの如き多くの作家達、更には「啓蒙」の伝統を受けつぐ歴史家、思想家達さえも次第に未来への展望を失い、権力をブルジョアを絶えず弾劾し続ける姿勢を堅持しはしたけれども、結局政治的、社会的問題に背を向けて、ひたすら「芸術のための芸術」に最後の望みを賭けていったことは、ある意味で理解し得ることである。

しかしながら同時に、ミシュレ、ルナン、テーヌ、サント・ブーヴといった人達とも親交があった彼は、彼等の思想や方法が個人やその個性・才能を無視し、余りに社会的側面のみを重視することに大いに不満を表明してはいたけれども<sup>(3)</sup>、彼自身もある面で、彼等の科学主義、実証主義と共通点を有し、人間あるいは人間性を広く歴史的、社会的展望の中で考えていたことも又事実である。勿論、「現下の時代、思想家は(そして、芸術家とは重層的思想家でなくて一体何でしょうか?)、宗教も祖国も、いかなる社会的信念さえも持つべきではありません。絶対的懐疑は、今や僕には余りに明瞭に証明済のこととなってしまいましたから、今更言葉に表わすのも愚かなほどです。」<sup>(4)</sup>と云い、「私達の狭い感覚と、限りのある知性とで、どうして真と善との絶対的認識に達し得るでしょう。いつかは、絶対をつかむことがあるのでしょうか。もし生きてゆきたいのなら、何事に関してであれ、一個の明確な観念を持つのはあきらめねばなりません。人間性とはこうしたものなのです。……どんなに偉大な精神も結論はしなかったし、偉大な書物もしてはいない、何故なら人間性はそれ自体、常に歩み続けており、結論はしないものだからです。」<sup>(5)</sup>と主張する重層的思想家、絶対的懐疑主義者フローベール、「それに今日は一体政治を問題にする時でしょうか? 帝政や共和制

に賛成だ、反対だと言って熱狂している市民諸君は、有効なる思寵か十分なる思寵かについて論争している人々と同じ位しか役に立たぬと私には思われます。政治は神学と同じく死んだのです！ 三百年も生き長られたのだから、もう沢山じゃありませんか。」<sup>(6)</sup>と放つフーベール、「私はどんな政治的党派にも共感を持ってはおりません、というよりすべてを憎悪しているといった方がいい、なぜならみんながみんな見識が狭く、まやかして、子供じみており、東の間の事象に熱中し、総体的な視野に欠け、断じて効用の上に出ることがないからです。……私はこの時代のほとんどすべての騒乱に傍観者として参加して来ました。」<sup>(7)</sup>と宣言する党派憎悪、政治的傍観者フーベール、彼には自らも認めているように、体系的な社会・政治哲学、思想と言えようなものはなく<sup>(8)</sup>、その断片的な見解表明にしても、全く非構成的、即興的であり、矛盾に満ちたものである。しかも何よりも小説家であった彼は、当然具体的イメージ、想像力によって思考する人間であり、観念を観念として扱う型の人間ではなかったのだ。更に又彼の思想そのものも、内的あるいは外的（政治的、社会的）状況の下に、時代と共に変化を見せ、多分にアナキスト的言動をも弄した若き日のリベラリストは、次第にブルジョアの保守主義者そしてニヒリストへと変貌してゆく。思考の根本的態度を始めとする、かくの如き特質は、フーベールの政治思想の総体的把握を著しく困難にしてはいるが、しかし彼の生涯を貫ぬく政治的、社会的思想のある一つの統一性、連続性の存在を否定するものではない。

以上を前提として彼の政治思想を予め概括すれば、次の如くなるであろう。自由の絶対性とそれを抑圧する専制主義憎悪、事物判断の一つの絶対的基準としての正義と、正義に反し価値の混同を惹き起こす平等、並びにそれに基づく共和制・民主主義、及びそれらの根幹をなす普通選挙の否定、更には平等と専制の社会主義に対する嫌悪、そしてこれらの解決策としての実証主義的政治科学に基礎を置く、知的少数エリートによる正当な貴族制、高官政治という理想である。

次章以下に於いては、相互の有機的な関連付けを行いつつ、その一つ一つについて具体的に検討し、彼の政治思想の全体像を浮き彫りにしてみることとしたい。

## 第二章 自由と反専制

「ああ！ 如何なる世界に我々は入ろうとしているのでしょうか！ 異教、キリスト教、俗物教、これが人類の三大進化です。悲しいことに我々は、第三の時代の初めにいるのです。」<sup>(9)</sup>

普仏戦争敗戦の悲惨と屈辱を身を以て味わい、バリ・コミュヌ勃発寸前の物情騒然たる世相を目のあたりにして、「胆汁で窒息しそうです！」<sup>(10)</sup>と叫ぶフーベールが改めて確認したこの歴史認識は、終生一貫していたと言って良い。我々が生きている第三の時代、即ち俗物教時代を象徴するものは、言うまでもなくブルジョアであり、彼のブルジョア憎悪は一種の神話にさえなっている。他方、ブルジョア批判の尺度として彼がいつも引き合いに出す、社会最下層の貧しく誠実な百姓、労働者達——『ボヴァリー夫人』の農事共進会に於いて、同一農場五十四年間勤続で表彰される老農婦カトリーヌ・ニケーズ、女主人の家に一代奉公した『純な心』の女中フェリシテ——に深い共感を寄せてはいたけれども、やはり根底的には大衆蔑視の姿勢を持し、常に俗物ブルジョアや愚かしい民衆から遠ざかった高見、象

牙の塔に身を置くことを志していたのである。

「君は自分のことだけを念頭に置きなさい。帝政も進むにまかせ、扉を閉ざして、僕等の象牙の塔の天辺へ、最上階へ、空に一番近い処へ上りましょう。時々寒い思いもしますね？ でもそれが何です！ 星々がきらめくのを見ることが出来ますし、間抜けの七面鳥どものガアガアという声を聞かずに済みます。」<sup>(11)</sup>

芸術家、文学者以外の人間を軽蔑していた彼は、政治、政治家と見れば胸糞が悪くなるのだ。

「政治は僕をうんざりさせます。」<sup>(12)</sup>

「政治という政治をひっくるめて、僕にわかることは一つしかありません。それは暴動です。」<sup>(13)</sup>

「政治の動乱に対して抱くに応しい軽蔑」<sup>(14)</sup>

「なぜあなたは政治をそんなに醜いと思うのですか？ 一体何時それが美しかったでしょうか？」<sup>(15)</sup>

若き日以来、政治に対して徹底した軽蔑の姿勢を決して崩そうとはしなかったけれども、『ボヴァリー夫人』とりわけ『感情教育』に於いて、政治的・社会的分析をむしろ積極的に行ったとさえ言える彼が、政治の根本義と信じ、希求したものは、何よりも先ず「自由」であった。

「籠に入れられた鳥は、奴隸状態にいる国民達と同じ位痛ましく思われる。」<sup>(16)</sup>

そして「自由」を抑圧するものには、常に疑惑と警戒の目を向け、それが何であれ容赦はしない。

「世間には二つのものに向けて遍く絶えることのない陰謀があります。即ち、自由と詩に向けてです。趣味の人という連中が一方を根こそぎにすることを引き受け、体制側の連中が他方を糾弾することを引き受けているのです。」<sup>(17)</sup>

それ故に「規則やあらゆる種類の規制、同業組合、カースト、階級組織、同水準の寄り集まり、群を成すものに反感を持ち」<sup>(18)</sup>、「人の集まりや、規則や標準は大嫌い」<sup>(19)</sup>であるからして、「如何なる党派にも組したくなく、如何なるアカデミー、如何なる団体、何であれ協会と名の付くもののメンバーにもなりたくはない」<sup>(19)</sup>し、「どんな政治的党派にも共感を持たず、と言うよりすべてを憎悪している」<sup>(20)</sup>フローベール、こうした彼は従って「どんな専制主義も大嫌い」な「熱烈な自由主義者」<sup>(20)</sup>なのである。そして作家フローベールが求める「自由」とは、それなしでは創造し得ぬ芸術家にとって、その活動の根本をなす「絶対的自由」なのである。

「検閲とは、たとえどんなものであっても、醜怪極りないもの、人殺しより悪いものだと僕には思えます。思想に対する暴行は魂傷害罪です。ソクラテスの死は、今なお人類の意識に重くのしかかっていますし、ユダヤ人が呪われているという意味も恐らく、彼等が言葉の人を十字架にかけた、神を殺そうとしたということに他なりません。」<sup>(21)</sup>「芸術に関しては、どんな権力でも何と愚かなことか君はかって気付いたことがありますか？ あれらの素晴らしい政府どもは（王制であれ、共和制であれ）仕事を注文しさえすれば、納入されるものだと思っています。奴等は数々の賞、褒賞、アカデミーを設けますが、たった一つの事、ほんの小さな事、しかもそれなしでは何ももの生きていけないものを忘れていたのです。それは雰囲気なのです。そして二種類の文学がありま

す。僕が国民的（そして最上の）と名付けるが如き文学と、有識・文学通、個人的な文学です。前者の実現のためには、大衆の中に共通の思想の調子、連帯性（それは現在存在していません）、絆が必要です。後者の全的な伸張のためには、自由が必要なのです。」<sup>(22)</sup>

「権力は人間を愚かにす」<sup>(23)</sup>を哲学的公理とし、最晩年に到ってなお姪のカロリーヌに「立ち上ろうとすると人が（永遠の憎むべき人が）それを抑えつけるのだ。権力が本質的に憎むべき存在である理由もここにある。それはこの世のために、一つでもいいことをしたことがあるだろうか。という訳で お前の伯父さんは骨の髄まで革命家だよ。」<sup>(24)</sup>と語り聞かせる彼は、終生変わらぬ熱烈な自由主義者であり、徹底した反専制主義者なのであった。その死に先立つ三か月前、ゾラが発刊を構想していた新聞に連載すべく熱中していた『十九世紀の暴君達』と題されるはずの一連の記事、このタイトルがその事を何よりも雄弁に物語っている。それは「文学」、「ジャーナリズム」から始まって「財政・金融」、「ロートシルド商社の犯罪」そして「行政」に到るまで、当代を牛耳りその自由を圧殺している暴君どもを厳しく断罪するはずのものであり、「すべては、そうした憎むべき人間どもは、ワーテルローやセダンよりも多くの涙を流させたことを証明するためなのである。」<sup>(25)</sup>

### 第三章 反社会主義

「僕は現代の専制主義というものは、いい加減いやだと思っています。間が抜けていて、脆くて、それそのものとして臆病に見えるからです。」<sup>(26)</sup>

1846年8月8日、ルイズ・コレ宛に多分に審美的ロマンティストの感覚を以て、かく記したフローベールにとって、一体「現代の専制主義」とは何であったのであろうか。既に前章に於いて考究した如く、先ず第一にそれはいわゆる政治体制上の専制主義、暴政を指すことは疑い得ないし、同時に又政治体制の如何を問わず、あらゆる自由を抑圧し、一切を秩序の名の下に規制する広義の専制主義、独裁主義をも意味することは明らかである。そしてより当時の政治状況ないしは体制に即して言えば、彼の憎悪の大きな対象の一つは「社会主義」であった。ただここで注意しなければならないのは、史家も指摘する如く、当時のいわゆる初期社会主義あるいはその概念なるものは、世紀末以降の本格的な、即ち現代的な意味での社会主義と必ずしも同義語ではなく、とりわけフローベールの用語にあっては、時に民主主義的、共和主義的ないしは実証主義的なものさえ含まれていることを念頭に置いておく必要がある。

既に1850年、東邦旅行の途次ルイ・ブイエ宛に書いている。

「僕は、……社会主義の本を読んだ。（オーギュスト・コントの『実証哲学』だ。）……教員だけ読んでみた。馬鹿々々しさにあきれかえったよ。それに僕の子感に間違いはなかった。この中には、はてしれぬ滑稽の筋脈がある。醜怪なものカリフォルニアがある。おそらくは又別のものもあるだろう。あり得ることだ。帰国してから僕がやってみよう第一の研究の一つは、僕等の社会を動揺させ、廃墟で覆うぞと言っておびやかす、この歎かわしいユートピア全体を調べることであるのは確かだ。」<sup>(27)</sup>

率直に社会主義に対する恐怖をさらけ出した彼は1852年、反自由、反個性、統制、聖職者的専横の故に、これを全面的に否定する。

「僕の言う貶めたいという偏執は、全くフランス的なもの、平等と反自由の国のものです。と言うのも、我が愛する祖国では自由が忌み嫌われているのですから。理想的な国家とは、社会主義者達によれば、巨大な怪物のようなもので、あらゆる個人的な活動、あらゆる個性、あらゆる思想を呑み込んでしまい、すべてを統制し、すべてを自分の手で行うものだというではありませんか？ ああした人達の狭量な心の底には、聖職者的な専横の意志がひそんでいます、「すべてを清算し、すべてをやり直し、他の土台の上に築き直さなくてはならない」云々。このような夢で得をしない愚劣さや悪徳はありません。今、人間はいつにも増して狂信的であると思いますが、この狂信は人間自身に向けられているのです。」<sup>(28)</sup>

芸術の理想を高く揚げ、身を以て追求していたフローベールにとって、「偉大な人間は無用になるだろうというフーリエの言葉」<sup>(29)</sup>ほど冒瀆的なものはなく、高貴な理想を持たず、ただ低劣な本能を満足させることに汲々とする社会主義、その唯物主義（物質主義）は絶対に我慢のならないものであった。

「おお、社会主義者達よ！ それがまさに君達の潰瘍なのだ。つまり君達には理想が欠けているし、それで、君達が追求するあの物質そのものを、波のように手からこぼれてしまう。人類を人類それ自身のために、そしてそれ自身によって熱愛すること（このことは「芸術」に於ける効用のドクトリン、社会福祉と国是の諸理論、あらゆる不正と偏狭、権利の犠牲、「美」の平準化に通じている）、この口腹崇拜は厄介なことを惹き起すと言いたい」<sup>(30)</sup>

更にいささか下劣な比喻で、

「社会主義の夢は、肥満した畸型の人類を……家畜小屋にすわらせて、そこで人間どもが酔っぱらい、自己満足の体で目を閉じて、昼飯を消化し夕食を待ち、下へ大小便を垂れ流しながら、畢丸の上で身を左右にゆすっていることではないでしょうか？」<sup>(31)</sup>

1848年の二月革命、六月暴動及びそれに続いたルイ・ナポレオンのクーデタを歴史的背景とする『感情教育』執筆のために、60年代初頭から精力的に自由主義、実証主義、社会主義関係の書物を読み進めた彼は、ラムネー、コント、ブルードン、彼等を「あわれな無価値の輩」、「大道化師ども」と侮蔑し、更にサン・シモン、フーリエ、ルイ・ブランへと進んで行く。

「フーリエ、サン・シモン、等々……何という専制君主、何という無作法者達！ 現代の社会主義は下男のようなみすぼらしい奴の臭いがする。連中は皆、中世と特権意識にどっぷりつかったお人好しどもだ。彼等を集合させる共通の特徴は、自由とフランス革命に対する憎悪なのだ。」<sup>(32)</sup>

彼は社会主義の内に潜む不可避的な権威主義、専制独裁主義の傾向を、逸速く見て取り、こうした傾向や更にはその人道主義、平等主義（後述するように、彼はこのいずれをも否定する）も、教会ないしはキリスト教の伝統から由来するものであるとして、痛烈な批判を浴せている。このような激しい言動は、パリ・コミューヌそして第三共和制の混迷続く1873年頃まで一貫して見られるものなのだ。

「私が社会主義の内に発見したキリスト教的要素は非常に巨大なものです。ここに二つの短かい覚書が、机上にあります。

「この体系（彼の体系）は無秩序な体系ではない。それは福音書を源泉としており、

この聖なる源泉からは憎悪、戦闘、あらゆる利害の相剋などは生れることは出来ない。即ち、福音者のなかに叙述された教義は平和、統一、愛の教義だからである。」  
(ルイ・ブラン)

「私は敢えて更に一步を進め、日曜日に対する尊敬の消失と同時に、我が国の詩人の魂から最後の詩的情熱の火花が消え尽くしたのだと言いたい。人々も既に言った、宗教なくして詩文なし、と。」(ブルードン)<sup>(33)</sup>

二月革命から二十年後、「目下1848年の革命に取り掛っていますが、……当時のカトリックの影響はなかなか大きく、又遺憾なものがあると思います。」<sup>(34)</sup>という見解を明らかにし、更に次のような認識に到達する。

「新カトリック教と社会主義が相俟って、フランスを馬鹿にってしまったのです。すべてが聖母懐胎と労働者の飯碗との間でごった返しています。」<sup>(35)</sup>

「我々の悪の一部は、共和主義的新カトリック教に由来すると思います。」<sup>(36)</sup>

結局フローベールによれば、社会主義にあっては「すべてが宗教的啓示から出発しており」<sup>(36)</sup>、その「社会的ユートピアの基底を形成」するものは、「暴政、反自然、魂の死」<sup>(37)</sup>なのである。そして更に彼は「十九世紀に悲しむべき影響を及ぼした、すべての大道化師ども」<sup>(38)</sup>、「彼等が48年に成功しなかったのは、伝統の大きな流れの外にいたからです。社会主義は過去の一つの顔です。イエズス会の教義がそのもう一つである様に。」<sup>(39)</sup>と極付けている。

ところで、その外にいたが故に、二月革命が第二帝政というあの皮肉な結末を迎えねばならなかった、いわゆる「伝統の大きな流れ」とは、一体彼にとって何であったのだろうか。「ねえ君、これが現状なのです。絶対に聖職的なのだ。それは民主主義の愚劣の産物なんです！ ジャン・ジャック、新カトリック教、ゴシック、そして博愛の道を取らないで、ヴォルテール氏の大道を歩み続けていたならば、我々はこんな羽目に陥ってはいないであろうに！」<sup>(40)</sup>

「我々が道徳上、政治上こうまで低劣なのは、ヴォルテール氏の大道、即ち「正義」と「義務」の大道を行かずに、感情によってカトリック教に通ずるルソーの小径を取ったことによるとさえ信じているのです。我々が「博愛」ではなく「公道」に対して心を砕いていたなら、恐らくもっと高尚になり得ただろうと思います。」<sup>(41)</sup>

フローベールは明らかに、「伝統の大きな流れ」の源泉を、ヴォルテールを始めとするモンテスキュー、デイドロ等のいわゆる十八世紀啓蒙思想家達の中に見ていたのであり、そうした意味では明確に啓蒙主義の偉大な伝統に立ってはいしたが、しかし直接的にカトリック教そして社会主義につながって来ると考えたルソーは、決して認められなかったのである。

かくの如く、書簡に於いて見る限り、彼が社会主義思想に対して全く相容れぬ、根っからの反社会主義者であったことは明白である。しかしながら『ボヴェリー夫人』、とりわけ『感情教育』といった小説に於ける、彼の政治・社会分析を検討してみると、こうした一方的な極付け方には、いささかの疑問が残らざるを得ないのである。

フローベールとマルクス、このおよそ対蹠的に見える二人を並べ、それに焦点を合わせることによって、見事にフローベールの政治意識を分析したエドモンド・ウィルソンは、その著『重層的に考える人』所収の一篇『フローベールの政治学』の中で、「フローベールは、自分で考えている以上に、当時の社会主義思想と共通のものを豊富に持ち、又恐らくそれに大

きな影響を受けていた」こと、そして「フローベールの社会観が、社会主義理論に最も近づくのは『感情教育』に於いてであり、実際この作品に於けるフローベールの1848年の革命の取り扱い方は、マルクスの『ルイ・ナポレオンのブリュメール十八日』に於ける同じ事件の分析と驚くほどよく似ている」ことを指摘している。そしてこの前置きが続いて、具体的に『感情教育』を分析した彼は、1848年の事件に対するフローベールの考え方とマルクスの考え方が分れる顕著な例として、社会主義者からプロレタリアを迫害する警官に変貌するセネカルの場合をあげて、「それは社会主義者の中に最初から内在する社会主義の展開」であり、「彼の警官としての行動と社会主義的な管理への憧れは共に独裁専制への衝動から来るものである」と考えるフローベールは、「マルクスさえ気付かなかった危険」、「プロレタリア革命の成果として権力の座についた社会主義でさえ、ほとんど先例もないほど無慈悲な政治警察を生み出し得るものであるということ——いくらマルクスをお手本にしても、民主主義的な手続きではなくて独裁的な管理を強調すれば、こういう禍いを惹き起すことになるということ」を暗示していると結論している。<sup>(42)</sup>

確かに鋭い分析であり、こうした一面が多分に彼の内に存することは否定し得ない。しかも観念的哲学者ではなく、何よりも作家であったフローベール、その想像力が具体的イメージとして見事に定着した作品にあっては、実に変幻微妙な陰影を含んでおり、性急に一つのレッテルを貼ってしまうことは危険であろう。しかしながら、より率直な物言い、思想の表明を許す、いわば不満の「排け口」、精神の「安全弁」としての彼の書簡の役割の一端を考える時、同時期の手紙が社会主義に対する激しい批判と揶揄に満ちているという事実は、やはり本質的には彼が反社会主義者であったことを証明していると断言しても誤ってはいまい。

#### 第四章 反共和制，反民主主義

社会主義の他に、更にフローベールが「現代の専制主義」と考えるもの、それは共和制であり、民主主義である。「群集は、多数は常に馬鹿なものです。」<sup>(43)</sup>、「大衆は所詮大衆であるのです。」<sup>(44)</sup>、「民衆とは永遠の未丁年者です。彼等は（社会構成要素の階級では）常に最下級にいるべきなのです。何故ならば彼等は数であり、群であり、無限なものにすぎないのです。」<sup>(45)</sup>と繰り返し表明する大衆蔑視の思想、「平等という観念は（即ち近代的民主主義のすべては）、本質的にキリスト教的思想で、正義の観念と対立するものです。」<sup>(46)</sup>、「「正義」……我々のすべての悪はこの道徳の根本概念を、まるで忘れてしまったところから起ったのです。この概念は私の考えでは、全道徳を構成するものです。」<sup>(47)</sup>として彼が生涯を通じて高く揚げた「正義」、そしてこの「正義」に反するものとして再三強調する「平等」・「平等思想」の否定、「平等とは、すべての自由と卓越と自然そのものを否定するものでなくて、一体何でしょうか？ 平等とは奴隷状態です。」<sup>(48)</sup>、「平等という急進派によって称えられ全く目新しかった独断も、生理学と歴史とによって実験的に覆えられました。」<sup>(49)</sup>、それらに「89年は王制と貴族制、48年はブルジョアジーを、そして51年は民衆を打倒しました。下種で愚かな下層賤民以外にはもはや何も存在しません。我々はすべて同水準に共通の凡庸さに、沈み込まされているのです。社会的平等は精神の中へ入り込んだのです。本は皆のために、芸術は皆のために、科学は皆のために作られるという訳です。……人類は精神の



低下に熱中しているのです。』<sup>(50)</sup>、「個人を引きずるものは、もはや専制君主ではなく、群集であり、公共福祉であり、不滅の国是であり、全国民の声であり、ロベスピエールの格言でしょう。』<sup>(51)</sup>という歴史的認識とが重ね合わさった時、彼の内に強固な根を張ったものが、共和制、民主主義の憎悪であったとしても何らの不思議はない。

彼は当代の共和主義にも、又民主主義の中にも、自由を、個人を抑圧し押しつぶす、「人民という名の主権者」<sup>(52)</sup>による新たな専制主義を見出すのだ。

「如何なる色合を帯びた共和主義者も、およそ最も野蛮な訓育家です。組織や法律を、修道院のような社会を夢見ているのですからね。』<sup>(53)</sup>

「個人は民主主義のために否定され、完全に委縮の状態にあります。神権の強大な専制の下に於けると何ら変わりがありません。』<sup>(54)</sup>

「人が共に送るあの家畜の生活は、我々を失墜させる何かを持っているのです。それが現代の夢なんだ！……民主主義！ 平等！」<sup>(55)</sup>

「人道主義者、共和主義者等々の不毛でひからびた全種族」<sup>(56)</sup>と二月革命時のペルタン、ラマルティエヌといった輩を嘲罵し、「共和政体はあらゆる議論を超越す。」という言葉は、「法王は無謬なり。」という信仰に匹敵するものだ。』<sup>(57)</sup>と断ずるフローベルは、パリ・コミューヌ崩壊直後の第三共和制を見て、「ブルジョア共和国が安定するやも知れないとの御意見には私も賛成です。高邁な理想のないことが、却って根強さを保証するものです。』<sup>(58)</sup>と皮肉な感想をもらし、「共和国とか君主制とかいう言葉は……近代の共和国と立憲君主制は同一なものです。だがそんなことにはお構いなしなのだ！ 人々はそれを巡って争論し、叫び合い、殴り合っているのです！」<sup>(59)</sup>と述べている。そして既に1869年、「帝政や共和制に賛成だ、反対だと言って熱狂している市民諸君は、有効なる恩寵か十分なる恩寵かについて論争している人々と同じ位しか役に立たぬように思われる。』<sup>(60)</sup>と書いていた彼は、1875年にははっきりと結論を下すのだ。

「共和国建設（というのはそれを破壊しようという新らたな愚劣にまで、まさに我々は立到っているのですから）、共和国建設それだけでは、私ははっきりと言いますが、私の幸福には十分ではありません。』<sup>(61)</sup>

共和制は勿論のこと、何らかの政治体制やその変革、極言すれば政治そのものによって人間が救済され、幸福になれるなどということは、もはや彼にとっては幻想にしか過ぎず、到底信じ得ないことだったのである。

民主主義に関しては、「これによって僕は近代民主主義の平等思想と偉大な人間は無用になるだろうというフーリエの言葉に与することになります。』<sup>(62)</sup>と1852年、「多数者の言い分は常に正しく、少数者のそれは常に誤っていたことを証明し、……偉人をすべての阿呆どもに、殉教者をすべての死刑執行人どもに生贄として捧げる」<sup>(62)</sup>「我が『紋切型辞典』」<sup>(62)</sup>を構想するなかで、これを揶揄、嘲笑した彼は、更に次の如く言っている。

「現体制（「民の声は神の声」という素晴らしい言葉に基づいた）から引き出すべき唯一の教訓は、民衆の考えは王の考えと同様に使い古されたものだということです。』<sup>(63)</sup>

こうした徹底した民主主義否定の姿勢は、終生変らぬものであった。彼にとって民主主義とは「汚らわしい道」<sup>(64)</sup>であり、「すべてはあらゆる人々に属し、最大の誤謬が多数者の利益のために存在するという民主主義の視点」<sup>(65)</sup>は、「あんなにも個人を低め」<sup>(66)</sup>、その「すべての夢は、プロレタリアをブルジョアの馬鹿さにまで引き上げることに存する」<sup>(67)</sup>のであ

る。更に「すべては基体として「妬み」と呼ばれる主罪を持っており、それが民主主義の基礎なのだ」<sup>(68)</sup>とまで言い切り、「民主主義の低劣極まる妬み根性に対する嫌悪の情」<sup>(69)</sup>を抑え切れないのだ。民衆詩人ベランジェを、「民主主義と民衆に対する愛そのものによって忌み嫌い」<sup>(70)</sup>、「彼の孫どもの中にあり……その影響たるや慨歎すべきものがある」ルソーを、「物欲しげな専制的民主主義の蒸気機関」<sup>(71)</sup>と断罪、コミューヌ末期には、「私は民主主義（フランスで意味するような）を憎みます。正義を賭しても聖寵を強調したり、権利を否定したり、要するに反社会性の民主主義なんか真平ご免です。」<sup>(72)</sup>と虚飾なき心情をぶちまけている。1876年、「民主主義の平等」は……この世の死の要素のように思われる」<sup>(73)</sup>と漏らし、「群集との接触は次第次第に厭わしくなって来ました。あなたの友は民主主義者ではないのです。」<sup>(74)</sup>と自ら断言するフローベールにとっては、結局「一方では宗教、又はカトリック教という言葉も、又他方進歩、博愛、民主主義という言葉も、もはや現在の精神的要求には応えることは出来ない」<sup>(75)</sup>のであった。

以上の如く、何よりも自由をそして正義を愛し、価値の混同を断固排撃する、大衆蔑視、反平等主義、反民主主義、反共和主義のこのペシミストは、その当然の帰結として一方に於いて、民衆の平等なる政治的権利としての普通選挙に大反対であり、又他方では教育上の平等、即ち教育によって無知蒙昧な大衆が啓蒙され、高められるということなどは信じられないが故に、無償義務教育に大いに懐疑的なのである。

先ず無償義務教育について見てみよう。

「全国民に「義務教育」を希望すると言っておられたので、いささか不満に思っております。この私はあらゆる法律、政治、規則等、すべて義務的なものは大嫌いなのです。私に何ごとかを強制する社会というものは、一体何処の誰なのか。私には主人などいないはずです。」<sup>(76)</sup>

「善良なる人民は、「無償で義務的な」教育によって完成されるでしょう。誰も彼も《プチ・ジュールナル》や《フィガロ》を読めるようになった時、人々のはもはや他のものを読むことは止めてしまうでしょう。何故ならばブルジョアも裕福な紳士も、これ以上何も読まないではありませんか？ 新聞とは人間を愚鈍な獣に化す学校です。何故ならばそれは人々から自ら考える労を省くからです。」<sup>(77)</sup>

そして再び「無償義務教育はただ馬鹿者の数をふやすだけで、何の役にも立たぬ」<sup>(78)</sup>と繰り返して持説を強調した後、普仏戦争から第三共和制、パリ・コミューヌという政治上の混乱と失敗を、すべて教育の愚劣に帰し、次のように極付けるのである。

「教育の三つの段階は、この一年間にそれぞれ実を結びました。

- 1) 高等教育はプロシアをして勝たしめました。
- 2) 中等教育、即ちブルジョアの教育は九月四日の紳士方を製造しました。
- 3) 初等教育は我々にコミューヌをもたらしました。そしてその文部大臣は、ホームーを軽蔑するのを自慢にしていた大ヴェレス氏でした。」<sup>(78)</sup>

普通選挙に関しては、

「普通選挙の絶対無謬性は一つのドグマとなって、法王の絶対無謬性の後を継ごうとしています。働く者の力、多数の権利、大衆への尊敬は、家柄の権威、神権、精神の至高性の後を継ごうとしているのです。」<sup>(79)</sup>

彼によれば、普通選挙とは現代の君主神権説であり、法王絶対無謬説なのだ。

「普通選挙も、君主神権説より少しく増しなところがあるにしろ、同じく愚劣なものです。」<sup>(80)</sup>

「普通選挙に対する尊敬、フェティシズムは、私を法王絶対無謬説（ところでこれは最近大分権威を失墜しましたが）以上に憤らせます。」<sup>(81)</sup>

しかも皆が皆その前で卑しくも身を屈しているのである。

「何という偽善！一つの政党としてそれが恐れているものを、面と向かって攻撃する勇を持たず、皆かって夢想された最も屈辱的な愚劣の前に身を屈しているのです。即ち普通選挙……我々「万人の主権者」の前にです。」<sup>(82)</sup>

そしてこのようなインチキなドグマに屈従する限り、政治は偽りのものでしかあり得ないし、我々は永遠に愚弄され続けるであろう。

「この前の前の神さまたる普通選挙は、「ヴェルサイユの殺人者ども」を選出して、その信者達にひどい嘲弄を浴びせかけました。では一体何を信じたらいいいのか？何も信じないことです！これが叡智の始まりです。」<sup>(83)</sup>

「普通選挙という神さまに伺いたてて見れば、どんなことになるか知れたものではありません。……あゝ、我々は実に落魄れたものです、落魄れたものです！」<sup>(84)</sup>

従って

「先ずなすべきことは、普通選挙の廃止です。あれは人間精神の恥辱です。現在のままの状態では、ただ一つの要素が他のすべてのものを犠牲にして、のさばっています。数が精神を、教養を、民族を、金さえも支配しています。金だって数よりは増しなのです。」<sup>(85)</sup>

「金だって数よりは増しだ」と叫ぶフーベールは、エリート意識を剥き出しにして、更にその論理をエスカレートさせていく。

「普通選挙が今のままでいる間は、この事態は変わらないでしょう。すべての人間は（私の考えでは）如何に劣等な者でも、一票の権利を持っています。だが彼は隣人と同等の人間とは言えません。彼の隣人は彼の百倍も優っているかも知れないのです。企業に於いては（株式会社では）、すべての株主はその出資額に応じて票決権を持っています。国家の政治に於いても同様であるべきなのです。私はクロワッセの投票者二十人の価値はあります。財産も、精神も、種族さえ、即ちすべての力が考慮に入れられるべきなのです。ところが今日まではただ一つの力、数しか眼に入らないのです！」<sup>(86)</sup>

「1830年以来呆けた現実主義に我を忘れ」<sup>(87)</sup>、一方では又共和主義者にせよ、社会主義者にせよ、あるいは又民主主義者にせよ、事物をありのままに見ぬ輩が標榜する、いたずらに人をたぶらかす様々な偽りの「ユートピア」、その政治的、社会的ロマンティズムの幻想に惑わされ続けているフランス、「無知無学な」大衆、「人間の恥辱」・「万人の主権者」普通選挙によって与えられる権力、従ってそれを手中にすることにのみ汲汲とし、ひたすら大衆の水準にまで身を落とし、その下劣な欲望を満足させ、その幻想を養うことにのみ意を用いる諸政党、こうしたおおよそすべてのものが手を貸した歎かわしい現実を前にして、フーベールは言うのである。

「経験に徴するに、如何なる形態もそれ自体に善を蔵するということはありません。（卑見です。）オルレアン党にせよ、共和党にせよ、王党にせよ、各自の枠内にそれぞれ矛盾する理念をいくつも含んでいるのですから、それ自体は何らの意味もありません。ど

の旗もさんざん血と糞に汚されてしまいました。今こそこんなものはかなぐり捨てるべき時です。虚言よ、くたばれです！ 象徴も拜物も消えうせろです！ 普通選挙なるものが君主神権説に負けず劣らず愚劣なもの——少しは増しかも知れませんが——であることを証明するのが、このご時世の偉大な道徳的反省ではないでしょうか！<sup>(88)</sup>

かくして彼は「バダンゲ」<sup>(89)</sup>の前に屈伏した第二共和制の諸政党も、自らの血の代償たる自由を易易と手放し、皇帝に欲呼して恥じぬ順応主義、日和見主義の民衆も許しはしない。「あゝ！ 私は喉一杯の力で、人類の顔に唾を吐きかけずにはくたばらないでしょう。バダンゲにお礼を言います。彼に幸あれ！ 彼は私を大衆に対する軽蔑と民衆に対する憎悪へと再び導いたのだ。」<sup>(90)</sup>

しかし如何に大衆が、民衆が無能であり、又如何に軽蔑、憎悪はしていても、熱烈な自由主義者であり、絶対的自由を何よりも重んずるフローベールは、彼等から自由までも奪おうとはしない。決して権力を与えることは容認し得ないけれども、やはり彼は彼なりに大衆の豊饒な可能性は信じていたし、又信じたかったのである。

「群衆は、多数は、常に馬鹿なものです。私は多くの確信は持っていません。しかしこのことは確く信じています。だが如何に無能であろうと、大衆は尊敬しなくてはなりません。何故ならば、それは無限の豊饒な胚子を含んでいるからです。彼等に自由を与えるがいい、しかし権力は駄目です。」<sup>(91)</sup>

こうしたエリート階級意識の確認と、いわば全否定のニヒリズム的アナキズムとも言うべき悲痛な認識にまで到達した時、人は好むと好まざるとに拘らず、一種の出口なしの袋小路に迷い込むことになる。しかしながら幸いにもフローベールには芸術があった。彼が汚濁に満ちたこの世でただ一つ信じ、専らそれに精進することによってのみ自己の存在とその価値を認識し得る文学が、そしてその栄光に仕える者の誇りが、確かに結果的に見れば、それはエリート・ブルジョア作家の現実からの逃避としか言いようがないであろうし、それは又彼の思想に本来的に内在した傾向であり、ある意味での限界ではあったとしても、その最終的解決、自己救済として辿り着いた象牙の塔、そこに決然として籠ったのは、政治との彼なりの誠実な取り組みの果であったのである。

「この世に於いて大切なことは、魂をブルジョア的な、民主主義的な泥沼から遠く遙かな高見に持すること。芸術への崇拜は矜持を誘います。人間誇りを持ちすぎるということなし。これが私の倫理です。」<sup>(92)</sup>

## 第五章 フローベールの政治思想の変遷

数章に渡って、フローベールの政治思想——その信条とその憎悪——を見て来た訳であるが、こうした考え方に立つ彼の政治理想が、如何なるものであったのが最終的に問題となって来る。しかしながら、この解明のためには、既に行って来たいわば個別的な思想分析に止まらず、これを踏えつつ更に当時の政治情勢・事件とその歴史的展開とのより密接な関連付け、いわゆる通時的、総合的研究が必要不可欠なのであり、しかも従来このような観点からの考察が、仔細になされて来たとは言いがたい。そこで先ず当時のフランスの政治、社会体制にとっては勿論、フローベールの政治観にとっても決定的な転回点となった二大事件——1848年の二月革命と六月暴動並びにその最終的帰結たる1851年のルイ・ナポレオンのク

ーデタによる第二帝政の成立、及び1870年から71年にかけての普仏戦争、第二帝政の崩壊、パリ・コムューヌ、第三共和制の成立——に焦点を当てつつ、彼の政治思想の変遷を辿ってみることにしよう。

周知の様にフローベールは、1821年12月12日、ルーアン市立病院外科部長の子として生まれたが、この月ルイ十八世治下の王制復古期のフランスでは、ヴィレールによるウルトラ王党派内閣が成立、王党過激派の反動が一層激化し、同時に又こうした政情不安定下にも、ブルジョアジーが徐々にその実力を蓄えていった時期であった。1824年、シャルル十世が即位した時わずか二才、そして「銀行家の革命」とも言われる七月革命が勃発した1830年に、ようやく八才であったギュスターヴにとって、二月革命によりその終焉を迎えることになる、オート・バンク＝上層金融貴族を支柱に大工業家及びブルジョア大地所有者層を基盤とする、ルイ・フィリップ治下の七月王制、まさにこの時期が彼二十六才に到るまでの青少年期、いわゆる精神形成期の時代背景なのである。

ところでこの時期の彼の政治的見解表明は驚くほど少ない。書簡にしても、いわゆる初期作品にしても、未だロマン主義の影響の色濃い文学的夢や文学論にほとんど満ちていると言ってよい。こうしたいわば非政治的傾向は、程度の差こそあれ終生ほぼ一貫したものであり、そのことは又一方に於いて彼が既に幼くして文学以外に自己の関心も、生きるべき道も見い出さなかった、天性の芸術家であったことの証左ではあるが、他方我々が青春の一時期に多少とも罹るいわゆる「政治熱」とは余り縁がなかったということには、やはり一種の奇異の念を抱かざるを得ないし、それは又確かに精神・意識の下部構造と深くつながった、ある意味で文学そのものをも規定するものであるだろう。

とはいえ1830年、「新旧両世界の自由」と「ラ・ファイエット」を称え<sup>(93)</sup>、1833年ルイ・フィリップがルーアンを訪れた時、「たった一人の王のために駆けずり回り、お祭り騒ぎする」の目をあたりにして、「何と人間は馬鹿なんだろう！ 市民達は 何と見識が狭いんだろうか！」と慨歎し<sup>(94)</sup>、ルーアン王立高等中学校時代賞状授与式で、「長椅子を叩き壊しながら「ラ・マルセイユーズ」をわめきちらした」<sup>(95)</sup>フローベールには、既にそここに後年の思想の萌芽が見られはするけれども、むしろ少年ギュスターヴは、一層の民衆運動弾圧を策す治安立法「九月法」に反対して、革命家の言辞を吐き、一廉の革命家を以て自認していたことは確かだ。

「演劇の検閲が力を盛り返し、言論の自由が廃止されたことを僕は 腹だたく思うね。ああそうとも、この法律はゆきわたるだろうよ。人民の代表者達なんぞ忌まわしき裏切り者の一群にすぎないからね。彼等の目に入ることは利害関係であり、その目ざすところは低劣さ、彼等の名誉はばかげた自尊心、その魂は泥の魂りなのさ。だが何時か、やがて遠からず、人々は第三の革命を始めるだろう。頭に注意しろ、血の海に気をつけるんだ。今や人々は文学者達からその良心を、芸術家たる良心を取り上げようとしている。全く僕達の世紀は血なまぐさい事件に満ちている。……人間達よりも王冠よりも王よりも偉大な、その神の玉座とともに常に感激のうちにかかっている「芸術」にとにかく精を出そうではないか。」<sup>(96)</sup>

こうした彼は1834年4月、リヨン、パリでの労働者の暴動、パリ、トランスノナン街の虐殺等相次ぐ抵抗と弾圧の社会不安の中、共和派による陰謀事件の被告達を熱烈に崇拝していた。

「僕達がノジャンにいた時に四月事件の被告が審理された。あゝ、闘技者のような体つきのコンディエールを僕は見たよ。男性的で恐い顔つきの男だった。ラグランジュも見た。ラグランジュ、こいつはシーザーの目と、フランソワ一世の鼻と、キリストの髪と、シェイクスピアの髭と、共和派のチョッキである。ラグランジュは崇高なる精神を持ったあまたの人々の一人なのだ。ラグランジュ、こいつはナポレオンとかV・ユゴーなどのような時代の子である。それは詩と反抗の人だ。時代の人、即ち憎悪と呪いと羨望のまとなのである。この世では追放の身だが別の世界なら神となるだろう。」<sup>(97)</sup>

エリザ・フーコーとの運命的な出会いの年1836年、依然としてロマン主義の影響は濃厚に見られるものの、この頃から次第に個性的な作風が感じられるようになって来る『この香を嗅げ』以下の初期作品に熱中した高等中学時代は、1839年12月、彼十八才の時、不当に放校された級友の処分反対運動を行い、結局青年らしい純粋な潔癖さ、正義感から退学、自宅でバカロレア準備に打ち込むことで終りを告げるが、この間の政治思想を具体的に跡づける資料は皆無に等しい。又その後、1840年のバカロレア合格、ピレネ・コルシカ旅行、翌41年11月10日パリ大学法学部に形だけ登録、文学に本格的に取り組むパリ時代を経て、彼を一生苦しめ、ある意味でその生涯を決定づけたあの癲癇に似た宿痼の最初の発作に襲われ、遂に学業を放棄した1844年、初稿『感情教育』の完成、イタリア旅行の1845年、そして父の死、それを追うが如く夭逝した妹、生後間もない姪を引きとり母と共にクロワッセの家に住み、「クロワッセの隠者」の生活が始まる一方、ルイズ・コレとも知り合った年、彼二十五才の1846年と続くこの時期も、諸作品とりわけ『思い出・覚書・瞑想』に散見する格言の断片——例えば、「保守派の連中がかくも陋劣で、共和主義者がかくも愚劣なのはなんとも困ったことだ。」「人類の未来だの、民衆の権利だの、どれもこれもたわけた世迷いごとだ。」<sup>(98)</sup>——を除けば、数少ない書簡がわずかにこの跡づけを許すのみである。

「作家は牢獄に放りこまれ小冊子による論客には金を払っている。だが一番グロテスクなのは良俗を保護し正統的な考え方に対する侵害を〔罰している?〕ことだ。」<sup>(99)</sup>

「僕達は今の王朝を余り好きではない。」<sup>(100)</sup>

「あの破廉恥漢ルイ・フィリップ」<sup>(101)</sup>

「僕には自由が必要なのです。」<sup>(102)</sup>

「我が公民的諸自由の破廉恥な強奪者の友、ワールという奴」<sup>(103)</sup>

更に、後年の「群集が好きになれるのは、ただ暴動の日だけです。」<sup>(104)</sup>という言明と奇妙なつながりを見せる一節を含む次の手紙、

「籠に入れられた鳥は、奴隷状態にいる国民達と同じ位痛ましく思われる。政治という政治をひっくり返して、僕にわかることは一つしかありません。それは暴動なのです。……僕は現代の専制主義というものがいい加減いやだと思っています。間が抜けていて、もろくて、それそのものとして臆病に見えるからです。だが、古代の専制主義には深い信仰を抱いています。それは、かつて存在した最も美しい人間精神のあらわれだと思います。僕は、何よりも先ず空想の人、移り気の人、支離滅裂の人なのです。」<sup>(105)</sup>

そして結局、「政治は私をうんざりさせます。」<sup>(106)</sup>という言葉で1846年は終わっている。

1847年12月25日、選挙改革を主な要求とする政治改革運動の高まりの中で、ルーアンでも「改革宴会」が開かれた。王朝的左翼のバロヤクレミューが演説し、プチ・ブルジョア急進派との対立が表面化したこの宴会に、フローベールも結局出席している。

「僕は改革宴会に出ましたよ！ 何という趣味！……何という演説！ 如何なる代価でそれを勝ち得たかを考えると、何ものもこれ以上にその成功に対する軽蔑の念を僕に与えはしませんでした。「国家の舵取り、我々が駆け巡っている深淵、我々の旗の名誉、我々の軍旗の影、諸国民の友愛」が騒ぎ立てる愛国的熱狂のただなかで、僕は冷やかにそして又嫌悪の嘔吐を催していたのです。」<sup>(107)</sup>

ルイーズ・コレに宛てた「グロテスクで歎かわしい」この「改革宴会」に対する軽蔑と嘲笑に満ちた痛罵の端々に、次第に薄れて来たとはいえ十年程前には革命家を自認しており、しかも常日頃ブルジョアを激しく憎悪していたフローベールにして、やはり自己のブルジョア特権的地位に対する誇りが、ちらちらと顔をのぞかせてはいないだろうか。

さて問題の1848年の二月革命、六月暴動から1851年12月2日のルイ・ナポレオンのクーデタ、そして第二帝政へと続く激動の時代を迎える訳であるが、この時期はその理由は様々に推測されようが、いずれにせよ一つの事実として、例えば48年一年間の彼の書簡数わずか九通という数字に端的に示される如く<sup>(108)</sup>、直接的な資料が極端に少なく、又初稿『聖アントワヌの誘惑』が友人デュ・カンとブイエに火中に投ずべきだとまで酷評された後、1849年10月末からデュ・カンと共に東邦旅行に出発、翌々年1851年6月クロワッセに落ち着くまでおよそ一年半以上に渡って、少くとも四半世紀の行くえを決定したあの政治的動乱期のフランスを後にしていたという事情もあって、この間の彼の政治的行動や見解の十全なる把握ははなはだ困難である。従って我々の当面の関心事である二月革命及び六月暴動に際して彼が示した生の反応、彼が抱いた生の感情とかは、今日なお厚い秘密のヴェールに包まれていると言ってよい。勿論その後の彼の回顧的書簡や、この時代を背景とした『感情教育』等の小説によって、これを推論することは可能であるが、しかしそれらには不可避的に後年の彼の思想も入り込み、又同時に流れ去った時間の隔たり故に、ある意味で一定の距離をおいた客観的、第三者の見解、非人称的な政治・社会史となってしまう危険もなしとはしないのである。

疑い得ぬ事実、それは二月革命勃発と同時に、2月23日親友ルイ・ブイエと共にパリに出、翌24日エルデル通りやバレ・ロワイヤルでの戦闘を目のあたりにし、なだれ込む暴徒に続いて、デュ・カンと一緒にテュイルリー宮殿に入ったこと、更に4月10日よりしばらくの間パリの国民軍に入っていたことである。そして我々が聞き得る彼の最初の見解表明は、既にクロワッセに帰っていた3月、ルイーズ・コレ宛の返信に於いてなのである。

「この間の出来事すべてについての意見をお尋ねですね。まあ、それらすべては非常に滑稽です。狼狽した顔、顔、顔、見るととても愉快だ。あらゆる野心がべちゃんこになったのを見て、無上の喜びを味わっています。僕には新形態の政府とそこから結果して来る社会状態が、芸術に好ましいものであるかどうかわかりません。それが問題です。これ以上人がブルジョア的に、より無価値になることは出来ないでしょう。これ以上無価値になること、そんなことは可能でしょうか？」<sup>(109)</sup>

更に4月3日の芸術と心の友ル・ポワトヴァンの死、その悲しみを超えて10日エルネスト・シュヴァリエに宛てて書く。

「人生というのは何というつまらないものなんだ！ 共和国がそれを救うかどうか僕にはわからない。大いに疑問です。……僕は事態がどうなっているか知りません。当地ではすべて全く平穏で、非常に平静です。もっともかなり暗澹たるものがありますが。僕

は明日初めての歩哨に立ちます。昨日は「骨折損」だった。「自由」の樹を植えるためにね！ あ〜あ！」<sup>(110)</sup>

革命の坩堝の中で、あれほど沸き立ち希望に燃えた世論自体にせよ、彼自身にせよ、その興奮もはや4月にはかなり冷めて来ていたし、その上親友の死という衝撃も加わって、既にほとんど熱狂的な調子は見られず、極く平均的な国民軍兵士といったところである。そしてこれらの手紙から当時のはっきりした彼の感情、見解を導き出すことは困難ではあるが、唯一つフローベールが政治体制の変革に、敵意は全く抱いてはいなかったけれども、それに積極的に自己を賭けたとは思えぬし、又こうした政治的変革がつまらぬ人生に救いをもたらし、人間の運命を根底から変え得ると信ずることに非常に懐疑的であったということは、少なくとも言えるであろう。

いずれにしても、多数の文学者を巻き込んだ、革命からクーデタに至る変転目まぐるしい政治の嵐の中で、彼一人がそれと無縁であり得たはずはない。けれども市街戦に加わったボードレールやルコント・ド・リール、労働者救済に奔走したサンド、臨時革命政府首班であり大統領選挙に落選したラマルティエヌ、そして議員選挙に立候補、いずれも落選したユゴー、ヴィニエ、バルザック、デュマ・ペール、ブイエ、各人によって程度の差はあるにせよ、こうした人達の如く彼も又、何らかの形で自己を賭け、積極的に時代の変革に参加したと断言する証拠は、今の所ないのである。

結局この時期の彼の政治的行動、思想を推測するには、後年の書簡や『感情教育』等の作品によるの他はない。フローベール自ら「我が世代の精神史・感情史」<sup>(111)</sup>と自負し、社会学者G・ソレルをして「二月革命前後から、ナポレオン三世のクーデタ頃までを研究する歴史家にとって、『感情教育』は忘れることの出来ない資料の一つ」と言わしめたこの小説に於いては、既に紹介したE・ウィルソンの指摘の如く、フローベールの社会観・政治観は、その危険を鋭く抉り出しているにせよ、社会主義的色彩を帯びており、「所有権が宗教と同じ位にあがめられ、神と混同されている」<sup>(112)</sup>社会にあって、自己保全と自己の利害のみをただひたすら追求し、理想を持たず体制順応を事とするあらゆる政党、ブルジョアが徹底的に弾劾されているのだ。例えば「晴雨計の如く絶えず最近の情勢変化を自己の上にあらわし」<sup>(113)</sup>、「ナポレオンに、コザック兵に喝采を送り、ルイ十八世を、1830年を、労働者を、あらゆる政体を、次々に歓迎し、政権を愛する余り、それを得るには身売りも辞さなかった」<sup>(114)</sup>銀行家ダンブルーズ氏、そしてそのサロンに集まる「大部分の人達は少くとも、四代の政府にこもごも仕えて来た人間であり、自分の財産を護り、生活の不如意や面倒を免れるために、又はただ権力を本能的に崇拜する卑屈な根性から、フランスも人類までも売りかねない輩なのである。」<sup>(115)</sup>

『感情教育』にあって、我々が真に共感出来る人物は、六月暴動の市街戦でかつての社会主義者から変貌した警官セネカルに射殺されるデュサルディエであり、生糸工場の貧しい労働者の娘で十五才で年老いたブルジョアの妾に売られたフレデリックの愛人ロザネットであり、つまり貧しい労働者大衆なのである。そうではあるけれども同時にフローベールは、「ロベスピエールの処刑台の前に平伏したと思えば、次はナポレオンの長靴、ルイ・フィリップの雨傘の前にと次々に平伏し、何時になってもパンを口に放り込んでくれる人間にばかり忠勤はげむ虫けらども！」<sup>(116)</sup>プロレタリアート大衆、その無知、その無節操、その日和見をも決して糾弾せずにはおかないのだ。



東邦旅行の途次、「1852年の、大統領選挙の折に、大変動もなく、ブルジョアが遂に勝利を博するとすれば、僕等は更に世紀、しっかりと安定した社会に暮すことが出来るのだ。その時、政治に厭き果てた民心は、恐らく文学に慰めを求めるだろう。行動から夢想への反動が生ずるかもしれないのだ、そうなったら、僕等の時代さ。」<sup>(117)</sup>とブルジョア的、オプティミスティックな予言めいた言葉を口にしていた彼が、帰国して目のあたりに見たものは、まさに流血の革命の最終的帰結たる独裁政治への皮肉な移り行きであり、それに対して何ら有効な反撃をし得ぬ共和主義者、社会主義者達、自らの血で買った自由を自らの手で放棄して、皇帝ルイ・ナポレオンに歓呼・喝采する民衆の姿であった。

「平和に生きる唯一の方法は、一跳びに全人類の上に身を置き、彼等と視線以外の何ら共通なものを持たないことです。そうしたことはベルタンやラマルティエヌのような輩、そして人道主義者、共和主義者等々の不毛でひからびた（善に於いても理想に於いても非行動的な）全種族を齷齪させることでしょう。仕方がない！ 奴等は慈善を説く前に自分等の借金を払い、有徳であろうとする前にただ先ず誠実であろうとすればいいのだ。博愛は社会的偽善のこの上なく素晴らしい発明の一つなのです。しかもそれなのにイエズス会修道士に反対の叫びをあげている。あゝ、何という無邪気！ 我々は皆こういう状態に陥っているのだ。」<sup>(118)</sup>

「僕はバダングに感謝する。彼に幸あれ！ 彼は僕を大衆に対する軽蔑へ、そして民衆に対する憎悪へと再び導きました。」<sup>(119)</sup>

その著『フローベール』の中で、アンリー・ギューマンはこれらの発言を捉えて、「その苦々しさ、その怒りは裏切られた希望、欺かれた愛の印ではないだろうか」と述べ、「かつて博愛共和国という美しい神話に捕えられていたのではなかっただろうか」と推論している。そして特に第二の引用文の「再び導きました」という最後の語に注目して、「12月2日がフローベールを「大衆に対する軽蔑」へと再び導いたに違いなく、従って彼は大衆を軽蔑することを止めていたのであり、それ故に大衆を信頼していたし、恐らく助けようとしていたのであろう。」と結論している<sup>(120)</sup>。確かにいささかこじつけの臭いのしなくはない論理であり、しかも前にも述べた如く、これを証するに足る確たる証拠も、有力な傍証さえも今の所見い出されてはいないけれども、少くとも当時の彼の思想・心情のある面を衝いているのではないだろうか。

ともあれ二月革命とそれに続いた政治的動乱そしてその結末は、彼をして生来のペシミズムを一層深めさせると共にその後長い月日に渡って政治的無神論に投げ込み、そうした中で彼が次第にニヒリズム的アナーキズムの色を濃くしていったことは疑いない。「89年は王制と貴族制を、48年はブルジョアジーを、そして51年は民衆を打倒し」、「下種で愚かな下層賤民以外にはもはや何ものも存在しない」<sup>(121)</sup>以上、彼には今や何の信すべきものも残っていなかったからである。

さて1870年の普仏戦争と翌71年のパリ・コミューンは、『ボヴァリー夫人』でその華々しくもスキャンダラスなデビューを飾り、以後『サランポー』、『感情教育』を発表、ようやく文学的にも、社会的にも揺るぎない地位と名声を確立していたフローベール、しかし同時に早くも自己の老いと衰えをひしひしと身に染みて感じ始めていたフローベールにとって、更に一層恐ろしいショックであった。孜孜として書き継いで来た、若き日からの宿願の作『聖アントワヌの誘惑』の原稿を箱詰めにしてクロワッセに埋め、ルーアンに避難することさえ

余儀なくされた彼の怒り、その動転した姿は、愛する姪カローヌ・コマンヴィルの回想記『懐しき想い出』に余す所なく写し出されている。

「1871年4月、私がイギリスで数カ月を過ぎて帰って見ると、彼は大変変ってしまっていました。戦争が深い影響を及ぼしたのです。彼の身うちに流れる『ラテン魂』の血は、当時の、野蛮行為の再来に憤激していました。プロシア人と言葉を交わさなければならぬような立場に置かれるなどは、どんなことがあっても嫌だったので、現在の住居から逃げ出さねばならなくなってからは、ルーアンに逃がれ、ル・アーヴル河岸に小さな住居を定めました。しかし非常に住み心地が悪く、耐乏の生活とも言えました。祖母が老齢のためにもう家の中の整理に手を出せなかったので、家具や必要の品物を田舎から運び移すことをしないで、——すればなんでもないことだったのでしょうが——みなクロワッセに残して来てしまいました。クロワッセの家には、将校や兵など十人ばかりが入り込んでいたのです。

不安な生活から生じたやりきれない手持ちぶさた、自分の書齋も本も住もかも敵の居住によって汚されているという思い、これが伯父の感情と精神とを恐ろしいほどの悲しみと混迷とに陥れました。芸術という芸術が死に絶えてしまったような気持でした。何としたことだ。こんなことがあり得ることなのだろうか？ 文人の国でこんなに血の潮が押寄せてくるなどは、／　パリを包囲され、記念の建造物を日がけて弾を放った、それが何と学問の人々の仕業であるとは、／」<sup>(122)</sup>

「あゝ、もし母がいなかったら、もうとっくに出征していたでしょう」<sup>(123)</sup>と言い、「毎日プロシア軍の来襲を待ち構え」<sup>(124)</sup>ながら、「我が中隊の中尉なので、部下を訓練し、日曜日ごとにルーアンに軍事講習を受けに行き」<sup>(125)</sup>、「もしもヘーゲルの同国人どもがパリの攻囲を始めたなら、直ちにパリに進軍」<sup>(126)</sup>までせんとする熱烈な愛国者フローベール、「私は悲しみで死にそうです。私の家は何ということになってしまったのでしょうか？ 14人の人間が呻き、人を苟立たせるのです！ 私は女どもを呪います！ 奴等のために我々は滅びるので。私はパリがワルシャワのような運命に陥るのではないかと考えています。それを貴女は共和国に献げる熱情で私を悲しませるのですか。我々が明瞭極まる実証主義に敗れた時、どうして貴女はまだ幻影が信じられるのです？」<sup>(127)</sup>とG・サンドに向って歎き、訴えるフローベール、彼はその狂乱の極にあって、もはや自己が防衛しているものさえ信じられないのである。

「何事が起ろうとも、今日権力を握っている奴等は犠牲にされるでしょう。そして共和国は恐らく彼等の運命を追うのです。御承知の通り、私はこの哀れな共和国を防衛しています。しかし共和国は信じません。」<sup>(127)</sup>

悲しみと苦しみで「時には気狂いになりそう」<sup>(127)</sup>になり、「焦慮と悲しみに身を噛まれ」<sup>(128)</sup>、「何という瓦礫！ 何という墮落、何たる悲惨、醜行なのでしょう！ 今眼前にあるすべての現象を前にして、進歩とか文明などが果して信じられるのでしょうか？」<sup>(129)</sup>と叫ぶフローベールは、コミュニューヌ、その恐怖に文字通り震撼し、どんなブルジョアよりも憤激した。『感情教育』のロック老人のように、牢につながれた暴徒に引き金を引くことはなかったにせよ、その心情に於いては大差はなかったと言ってよい。

「駄目です！ いつも同じ繰り言、同じ空言です！ 今度のパリ・コミュニューヌなどは、全く中世に還ってしまったではありませんか！ はっきりしたものです！ 家賃の問題

などは殊に素敵です。政府は自然権にまでくちばしを入れ、個人相互の契約にまで干渉しています。コミュニューヌは借りたものは返す義務はない、他人への奉仕は他の奉仕によって払われるものではない、と断言しました。呆れるばかりの無能と不正です。……社会主義者がバダングやギョームの真似をするとは何ということですか？ 苛酷な裁判、新聞の禁止、無審理の極刑等。あゝ！ 群集とは何たる不道德な獣なのでしょう！ 人間に生れるとは何という辱かしいことなのでしょう！」<sup>(130)</sup>

「パリの蜂起は、私の眼には非常に明瞭な、むしろ単純極まるものとして映ります。何という退歩！ 何という野蛮人どもでしょう！ 彼等は如何に「リーグ」の、「マイヨットン」の奴等に似ていることか！ 衰れたフランスは決して中世から逃れられることはないのです！ 未だコミュニューヌというゴシック風の思想に低迷しているのです。そしてそれは又ローマの自由市に外ならないのです。」<sup>(131)</sup>

「もし我々がもっと啓蒙されていたら、もしもパリに歴史に明るい人々が大勢住んでいたら、我々はガンベッタをも、プロシアをも、コンミュヌをも堪え忍ばずに済んだであろう。」<sup>(132)</sup>と考える彼は、6月パリへ出てコミュニューヌの跡を、テュイルリー宮殿の破壊を見て言ったという。「もし人々が『感情教育』を読んでさえいたら、こんなことは起らなかっただろう」と。廃墟のパリから意気消沈してクロワッセに帰った彼は、G・サンドに書く。

「パリから帰って来たが誰も話相手がないのです。息がつまりそうです。疲労したというよりむしろ吐気を催しています。屍体の臭いもすべての口からもれるエゴイズムの瘴気ほどは、私の胸を悪くしませんでした。廃墟の有様も、パリ人の計り知れぬ愚劣を前にしては何物でもないのです。非常に稀な例外を除いては、誰も彼も私には縛り上げてしまった方がいいと思われました。人民の半ばは他の半分の絞殺する欲望に駆られています。それがお互いなのです。」<sup>(133)</sup>

コミュニューヌ中既に、「労働者諸君を一つ袋に入れて、皆んな一緒に川の中に叩き込んでしまいたいと思う」<sup>(134)</sup>ほどその蛮行に憤慨し、「あゝ！ 私はもう卑劣な労働者や、無能なブルジョアや、馬鹿な百姓、汚らわしい坊主どもには全く飽き飽きしました！」<sup>(135)</sup>とあらゆる階級の間人どもに愛想を尽かした彼は、コミュニューヌの奴等が人質のブルジョアを射殺し、パリを焼き払う段になると、全く自制を失ったかにさえ見えるのだ。

「私はコミュニューヌの全員をガレー船こぎの苦役に処し、この血染の馬鹿者どもをパリの焼跡の掃除に使役すべきだと思います。だがそれは人道に背くのでしょうか。人々は狂犬は優しく取り扱うが、それに咬まれたものに対してはお構いなしなのです。」<sup>(136)</sup>

しかし同時に彼は、パリの東部を占領するプロシア軍の力さえ借りて、狂気の「白色テロル」を断行したティエール率いるヴェルサイユ政府（臨時国防政府）をも「ヴェルサイユの殺人者ども」<sup>(137)</sup>と罵り、萌芽形態とはいえコミュニューヌのプロレタリア革命、民主的独裁に恐怖して、「あゝ、神様のお蔭だ、プロシア軍がそこにいる！」<sup>(137)</sup>と叫ぶ無力、無節操にして愚劣極まりないブルジョアどもにも胸をむかつかせ、そして「コミュニューヌ一味が、パリを焼こうとする理由を持っていなかったかどうか自問するほどに右翼に激怒」<sup>(138)</sup>し、「この後に来るべき、けちな反動はどうでしょう？ さぞ又坊主どもがのさばることでしょう！」<sup>(139)</sup>と「反動が荒れ狂い、すべての自由が絞殺される」<sup>(140)</sup>ことを極度に恐れているのである。

このように互いに徒らに破壊と混乱の限りを尽し、果しなく虐殺と自由の殺戮を繰り返す、この忌む内乱の中で、何よりも自由を重んずる彼は、彼なりに自己に忠実に、そし

て絶対的自由精神、懐疑精神に基づき中庸のバランスを、自己の内に保とうとはしてはいたけれども、かくも彼を恐怖の底に叩き込んでしまったコミュニスムに対するかつてない激越な非難、攻撃を見れば、「何事をも結論せず」、「なんらかの社会的確信をさえ持つべきではない」という彼の信念にも拘らず、フローベールが一つの立場を取り、一つの方向に大きく一步を踏み出してしまっていることは明らかだ。それは結局当時の多くの作家達——テヌ、デュマ・フィス、ゴージェ、ルコント・ド・リール等——と同様に、この騒乱の中に破壊と流血のみを見て、民衆と革命に決定的な幻滅と反感を抱き、なお一層芸術至上主義的傾向を深めていったと同時に、こうした危機的状況が彼の内に見え隠れしつつ潜在していた、階級意識を持ったブルジョアを目覚めさせ、一挙に噴出させる契機となったことである。

ルーアン市立病院外科部長の息子であり、後年母と共に暮らす不動産と年金そしてささやかな自己の収入による生活は、サルトル等の指摘を待つまでもなく、根源的にプチ・ブルジョア的なものであり、又彼の広く知られたブルジョア憎悪に偽りはないとしても、彼の意識の深層にルーアンのブルジョアとしての特権意識や素朴な誇りが存在したことは事実である。しかもフローベール流の「ブルジョア」という用語は、単なる社会的あるいは社会階級上のカテゴリーを超えており、例えば姪のコマンヴィル夫人が記しているように、「凡庸で、人を妬み、体裁をつくらうことばかり考え、偉大な物事や美しいことは何によらず軽蔑する人間という意味を含み」<sup>(141)</sup>、あるいは又モーリス・ナドーが定義している如く、「功利主義に従って思考し、感じそして行動する人間、個人をその人類に於いてそして社会的怪物のためにその単一性を否定する人間、この怪物がそれ自身の生存のために分泌する諸価値、即ちあらゆる幻想、善悪に分類されたあらゆる定義、言語のあらゆる常套句、そうしたものの軌跡、そのあらゆる装飾品で粧われ一般の真理の名の下に尊ばれ阿られる愚行、「諸国民の叡智」、道徳諸規範、こうしたすべてのものを正当で真であるとみなす人間、そういう人は皆「ブルジョア」なのだ。」<sup>(142)</sup>とすれば、営利や成功を問題にせず、「俗世」に背を向け「俗物」を憎悪する人々、思想家・芸術家のみがまさしくフローベールが問題にし得る人間なのであり、いわば選ばれた少数者だけが入るを許される世界に生きる彼自身、紛れもなく芸術の道の少数の選ばれし者、その良し悪しは別としてまさにエリート意識を持った精神貴族であったのだ。

「格言——ブルジョアを憎むは道徳の始めなり。この「ブルジョア」というのは、フロックコートのブルジョアも含めば、葉葉服のブルジョアも含みます。人民、もしくは正しく言って人類の伝統とは、我々文学者だけのことです。」<sup>(143)</sup>

「この僕等にしたらやっぱり貴族ではないでしょうか。最低の、或いは最高の貴族では？」<sup>(144)</sup>

「我が身を振り返ると……自分が有名なブルジョアだと思う時が大いにある。」<sup>(145)</sup>と述懐し、かねがね「ブルジョアとして生活し、半神として思惟すること」を「芸術家の生活に於ける実践的教義」<sup>(146)</sup>としていた彼は、1857年『ボヴァリー夫人』が風俗紊乱・宗教冒瀆の廉により起訴された時、ジャンフルリーに言明した「あなたは私の訴訟が現代文学全般の訴訟であると理解して下さいました。攻撃を受けているのは私の小説ではない。そうではなくてすべての小説であり、それと共に創作する権利が攻撃を受けているのです。」<sup>(147)</sup>という立派な建前にも拘らず、その裏に父の死後その地位を継いでいた兄アシルに宛てた手紙には、奇妙な論理が見られるのである。

「兄上がなされたことはすべて結構です。重要なのは、ルーアンからパリに圧力をかけさせることでしたし、又今もそうです。ルーアンで僕等の父上が占めていた、そして兄上が占めておられる権威ある地位についての情報が一番いいのです。人々は、取るに足らない人間を攻撃していると考えていた、それが僕に財産があるとわかった時から、目を見開き始めたのです。内務省で、僕達がルーアンではいわゆるお家柄なんだということ、即ちこの土地に深く根を下しているのであり、とりわけ僕を不道德の廉で攻撃することにより、沢山の人間を侮辱することになるのだということをお知らせする必要があります。内務大臣宛の知事の手紙の派手な効果を待ち受けています。いいですか、これは政治的な事件なんです。……いいですか、兄上、いずれにしても、今や僕はいっぼしの人間と思われているのですよ」(148)

1863年12月末カロリースに結婚を勧める伯父の言葉は、如何に姪を盲愛しているとはいっても、やはり常日頃の彼の言動から見て奇異としか言いようがない。

「伯父さんは何にも忠告らしいものは持合わせていません。ただC\*\*\*氏の態度は好意が持てます。それに性格、家柄、係累も明瞭です。こういうことはパリだとなかなか調べにくいものです。ここならもっと立派な人を見つけることも出来ましょう。しかし才気、面白味というものは、その日暮しの人だけが持っているものです。といって可愛い姪が貧乏人と結婚したなどということは空恐しいことで、考えるのも真平です。伯父さんは、お前が例え大人物でも、生活に事欠くような人と結婚するよりは、百万長者の食料品屋と結婚してくれた方が有難い。偉大な人物というものは、とかく貧乏の上に、残忍暴虐で、お前など苦しさの余り発狂するか白痴にでもなってしまいます。ルーアンに住む愚かしさは考えものです、それは伯父さんもよく知っています。しかし無一文でパリに生活するよりは、お金をたんまり持ってルーアンに住んだ方がどの位まししか知れません。それにお店の方がよくなってから、パリへ出て来てもいいではありませんか。」(149)

1869年ロワールの鉱夫の暴動やミュルーズの職人達のストライキにも、ほとんど関心を示してはいないのだ。

「政治は平穩です。リヨン近郊のサン・テティエンヌで鉱夫達の暴動がありました。何人かのプロレタリアがクビになりました。」(150)

「ミュルーズの職人さん達がストライキをしているので、窓や扉のカーテン、二脚の肘掛椅子、寝台兼用長椅子、こんなものに必要な布地も一か月後でなければ手に入らないという始末さ。」(151)

こうした自己の内なるブルジョア及びブルジョア意識は、フローベール自身時に苦々しくその存在を噛みしめてさえいたのである。

「自己の内に潜んでいるブルジョアに、どうにも耐えられなくなることさえ時々あります。」(152)

しかしながら自己の属するブルジョアが、そしてその基盤・特権がプロレタリアの下種下郎どもの脅威にさらされ、しかもこれに対して自らの身を護る術さえ知らぬ、全く無気力で愚かな自己の階級を目のあたりにして、コミュニヌの一味とみれば「犯罪人」だ、「殺人者」だ、「野蛮人」だと罵詈雑言して止まぬほど、身の毛の弥立つ恐怖に駆られた彼は、気が狂わんばかりに自己とその階級の防衛に躍起となり、ブルジョアどもを嘲笑・痛罵するのだ。

「保守党の連中は獣の本能さえ持っていません。(獣は少なくとも巢と食物のためには戦

う術を知っていますからね。』<sup>(153)</sup>

「この善良なブルジョアは増す増す馬鹿になって行きますね！ 投票さえ止めてしまったではありませんか！ 野生の獣ですら自己保存の感情に於いては彼等に優っています。情けないフランス！ 情けない我々です！」<sup>(154)</sup>

そしてルーアン市議会に宛てた有名な公開書簡（1872年1月26日付ル・タン紙に掲載）は、ブルジョアを必死に叱咤激励する彼の苛立ちと怒りそのものだと言ってよい。

「何も保守しない〔……〕保守主義者達！ あなた方はペンの持ち方も銃の持ち方も知らないんだ！ あなた方はガリー船こぎの徒刑囚どもに身ぐるみ剥がれ、牢屋に放り込まれ、喉をかつ切られるがままになっているのだ！ あなた方はもはや獣の本能さえ持っていない……」

結局二月革命、パリ・コミュニスムというルイ・ナポレオンの第二帝政の誕生とその終焉を画する、二大政治・社会動乱を通したフローベールの精神史の一つの特徴的な断面は、「自己の内に潜んでいるブルジョア」の目覚めとその苦々しい検証であり、この確認に基づき自己をも含めたブルジョアに対する嘔吐を催すほどの激しい嫌悪もさることながら、何よりも先ず自己の属するブルジョア階級の基盤を突き崩さんとする、次第に独自の発言権を以て台頭しつつあったプロレタリア労働者階級、一般民衆に対する抜き差しならぬ憎悪であり恐怖であった。そしてこうした社会的・政治的騒乱を、階級闘争として明確に認識し位置づけ得ず、従ってその新たな社会階級の解決も到底展望し得なかったブルジョア保守主義者、作家フローベールは、詰まる所社会科学の範疇では律し得ぬ「人間の愚劣」、「人間の無力」という抽象的、観念的ではあるが、深刻で痛切な人間認識に到りつき、遂にはすべての責めを社会階級を超えたものに帰したのであった。

「我々を苦しめるものはただ一つ「愚劣」のみです。しかしそれは恐ろしい力を到る所で振るっています。」<sup>(155)</sup>

「私は普遍的愚劣に〔……〕ぞっとしています！ 才気ある人々は何か「ノアの箱舟」に似たものを建造しなければならないでしょう。」<sup>(156)</sup>

「民衆精神は増す増す低劣になって行くように思われます。如何なる愚劣の深淵にまで我々は墜ちて行くのでしょうか？」<sup>(157)</sup>

「普遍的愚劣が横たわっています。時代は陰鬱ですし、私も時代と同じなのです。」<sup>(158)</sup>

「真の背徳、それは無知と愚劣なのだ！」<sup>(159)</sup>

「この世にはたった一つの罪しかありません。それは愚劣です。従ってそれを激しく憎悪しなければならないのです。」<sup>(160)</sup>

自らをして「これは私の遺言書であり、人間と、人間の営為とについての私の経験と判断の要約である」<sup>(161)</sup>と言わしめた未完の大作『ブヴァールとベキュシェ』に最後の力を振り絞りつつ、その死に先立つ一年余り前、「あなたが言われる世間に遍き愚劣という奴、あゝ、私はそれを知っています、私はそれを研究しているのです。これこそは敵です、これしか敵はいないと言ってもいい位です。私は自分の能力の範囲内でこいつと戦っているのです。今私が書いている書物は副題に「人間愚劣の百科辞典」とつけることも出来るようなもので、この仕事は私を圧倒し、この主題は私に浸透しています。」<sup>(162)</sup>と書き記したフローベールが、政治をテーマとしたその第六章の中で、『感情教育』と同じ時代を扱いながらも、後者に見られた階級的関心とは異って、一層人類そのもの、その「果てしのない人間愚」<sup>(163)</sup>を諷

刺し、徹底的に戯画化したのは以上の理由によるのである。フランス全土を揺るがせた、あの目まぐるしい政治の変転と狂気にも似た熱狂の果てに、皇帝万才の歓呼の声を聞いた時、ブヴァールと共にあらゆる政治思想をかじり、彼なりに時代の騒乱に参加したペキュシェが叫ぶ次の言葉は、そのままフローベールの心奥の叫びであったと言ってよい。

「有産階級の奴は人情知らずだし、労働者はやきもち焼きだし、坊主どもは下司だし、それに、民衆ときたら、鼻面に飯鉢さえあてがわれていたら、どんな暴君でも承知するんだから、ナポレオンはいいことをやってくれたよ！ 民衆なんか猿轡をはめて、皆殺しにしてもらいたいものだ！ 正義を憎み、卑怯で、無能で、盲目的な奴等のことだ、その位の報いは当然すぎるよ！」<sup>(164)</sup>

以上見て来た如く、二月革命時、『感情教育』執筆時そしてパリ・コムューヌを経て『ブヴァールとペキュシェ』へと到る間に、たとえそこに不意の断絶はなく、明らかに一定の連続性は認められるにしても、フローベールの政治思想は究極的には決定的なる転回を遂げていたのである。

## 第六章 フローベールの政治理想

前章まででフローベールの個別的な政治思想並びにその変遷を跡づけて来た訳であるが、このような政治思想に基づく彼の政治ないしは政治体制の理想とは、一体如何なるものであったのだろうか。勿論既に明らか様なに、生涯を通しての確固とした一定の政治理想を、彼は持ち得なかったし、又晩年に到ってその高まる人間不信故に、ニヒリズム的アナーキズムを決定的にしたことも事実であるが、しかしながらパリ・コムューヌ前後には、かなり混乱した状態に於いてではあるが、それなりに明確な理想を頭に描いていたことが見て取れるのである。

熱愛するバステリアを始めとして当時の新しい学問である経済学に早くから深い関心を示す一方<sup>(165)</sup>、『感情教育』執筆のために右から左まで当時の政治・社会思想関係の書物に一応目を通し、それなりの理解と見識を持っていた彼は、1869年に次の様に書いている。

「人々は国家と呼ばれる 奇怪醜悪な存在にどんな形態を賦与すべきか、ただそれだけに腐心して来たのです。経験に徴するに、如何なる形態もそれ自体に善を蔵するということはありません。(卑見です。)……従って問題は移りました。政府の形態、これはいづれにせよ似たりよったりなのですから、その最善の形態をとやかく考える必要はありません。科学に軍配を挙げれば足りるのです。これが刻下の急務。他のことはすべて否応なくこれに続くのです。純粋な知性人は世のすべてのサン・ヴァンサン・ド・ポールよりも人類に貢献しているのです！ しかも政治なんかは科学に従属せしめない限り永遠の愚劣です。一国の政府は学士院の一部門、それも最下級のものでよいのです。」<sup>(166)</sup>

1871年、彼は再び強調する。

「政治は実証科学たるべきです。(戦争既に然りです！)しかるに政治に携る人々は科学と正反対の道を歩いています。懐疑は絶無！ 検討はそっちのけ！ 何でも嘲罵！ 何でも偏見ですからね！」<sup>(167)</sup>

そして1878年、残された全ての力を傾注して、『ブヴァールとペキュシェ』の政治に関する章を構想・準備していた彼は繰り返し力説している。

「私は今「政治」を研究しています。何という愚かな容相！ だからそれに耽っている人々に対する私の軽蔑は、日に日に増しているのです。政治は科学の科学であるべきでしょうが、それは利害と「情念」に身をまかせているのです。その上、人は1848年には今日よりももっと愚かでした。社会主義者達とブルジョアどもはどっちもどっち、いやむしろ、ブルジョアどもの他には何もありません。』<sup>(168)</sup>

「フランス革命はドグマであることを止め、人間に関する他のすべてのものと同じく、科学の中に編入されねばならない」<sup>(169)</sup>と主張し、しかも「我々は大革命の後産である虚偽の泥濘の中を這いまわっているのです。あの革命は、「誰が何と言おうとも」、流産であり、出来損いであり、失敗だったのだ。』<sup>(170)</sup>と考えるフローベールは、コミューン壊滅後7月から10月にかけて、何の理想も原則も形而上学も持たぬ政府、即ち彼の待望する政治的実証主義の時代の到来を見て、あるいは見たと信じて、一縷の望みを抱くと共にやや安堵を覚えるのだ。

「政治の前途はしばし平穏のように思われます。あゝ！ 現状に、即ち無原則に、空言もなく、形式もなく生きる事に慣れられれば！ 私が思うにこの様な事態が現われたのは、歴史上初めてなのです。これが政治に於ける実証主義の始まりなのでしょうか？ そう希望しましょう。』<sup>(171)</sup>

「私は、貴女と同様に、ブルジョア共和国の安定が可能だと思います。高い目的の欠けていることが、安定の保証にもなり得る訳です。我々は初めて原則のない政府の下に生活することになるでしょう。政治上の実証主義の時代が始まるでしょう。』<sup>(172)</sup>

「私は貴女のように失望してはいません。現在の政府は私の気に入っています。彼等が何の原則も、何の形而上学も、何の空語も持たぬからです。』<sup>(173)</sup>

何よりも先ず政治を科学に基づかせること、即ち政治的科学主義、政治的実証主義を希求すること、こうした彼の考え方は当時の時代思潮と無縁ではない。第二帝政の成立という結末を持つこととなった二月革命からパリ・コミューンの凄惨な闘いとその壊滅は、時代を人道主義、理想主義そして社会主義のユートピアに絶えず裏切られ続けた幻滅、ペシミズムあるいは絶望的な宿命論で重苦しく彩ることになる。他方相次ぐ技術革新と科学の発達による産業革命の完了を通して、飛躍的な経済発展と資本主義の進展をもたらした、そうした陰での成長の歪み、社会・労働不安とは裏腹に、ブルジョワジーの支配力を強化していったのである。こうした時代精神に合致するものとして一世を風靡した実証主義のコントを始め、言語学のリトレ、歴史学のフュステル・ド・クーランジュ、哲学・宗教学・歴史学のルナン、哲学・文学批評・歴史学のテーヌ、医学のクロード・ベルナル、化学のベルトロなどに代表される如く、壮大な体系や形而上学を構築するのではなくして、個々の現実を注視し、科学万能を唱道する思想は、広く様々な分野を覆い、極めて特徴的かつ大きな時代思潮となっていたのである。

この様な流れの中で主張されたフローベールの政治的科学主義・実証主義という概念そのものは、政治的、社会的、文化的国情の相違を超えて、マルクスあるいはエンゲルスのそれと全く異質という訳ではなく、むしろ互いに基本的認識に於いては多分に共通のものを有していたと言ってもいいだろう。しかしながら、幾分情緒的側面もあったにもせよ、若き日に寄せた民衆へのある種の共感、二月革命やコミューンを体験したフローベールには既にうたかたの如く消え失せ、今やプロレタリアートの利益のために力を貸すことなどは余りにも



愚かしく、ましてやプロレタリアートの時代の到来などは夢想だにし得なかった、いや夢想するだに恐ろしいことだったのである。従ってその出発点に於いては、ある意味で共通の政治的認識に立ちながら、究極的に志向するところは全く正反対のものなのだ。

上述の如く、ひたすら「正義」を渴望、「平等」を否定するフローベール、「人間精神の恥辱」たる「普通選挙」を排撃、「ただ一つの力、教しか眼に入らぬ」ことに憤激し、「財産も、精神も、種族さえ、即ちすべての力が考慮に入れられるべき」ことを主張するフローベール、彼は既に『感情教育』の中で、フレデリックをして次の様に言わしめている。

「要するに、共和制などもう古い、と思うね。わかるものか。恐らく「進歩」はただ貴族政治、あるいは一人の人間の手でのみ実現されるべきものかも知れない。創意イニシアチブというのは常に上から来るものだ。何と言おうが、民衆はまだ未熟・未丁年なのだ。」<sup>(174)</sup>

敗色濃い普仏戦争の最中、彼は改めてG・サンドに同様な見解を表明している。

「貴女は、もしフランスが群集に最後の支配権を握られることなしに、中国風の官吏によって支配されていたら、どんな事になったとお思いですか？ もしも、下層階級の啓蒙などに努力を費さずに、上流社会の教育に力を注いでいたら、ケラトリー氏が公衆によって全く正当な方策と認められた、バード公国の強奪を提議するなどという光景を見ないで済んだに違いないのです！」<sup>(175)</sup>

パリ・コミューヌの血腥い闘いの中で、そしてその悲惨な帰結の内に、彼は一層自己の確信を深めて行く。

「この前の前の神さまたる普通選挙は、「ヴェルサイユの殺人者ども」を選出して、その信者達にひどい嘲弄を浴びせかけました。では一体何を信じたらいいか？ 何も信じないことです！ これが叡智の始まりです。もはや「原則」は止めにして科学の、検討の中に入るべき時です。唯一つ理性的なものは（私の言うことはいつもここに帰着しますが）中国風の官吏の政府です。ただ彼等が何事かを、又は多くの事をさえ知っていれば、それで足りるのです。民衆とは永遠の未丁年者です。彼等は（社会構成要素の階級では）常に最下級にいるべきなのです。何故ならば彼等は数であり、群であり、無限なものにすぎないのですから。多数の農民が読み書きを覚え、司祭の言うことをきかなくなったなどということは何事でもありません。ルナンやリトレのような人物が大勢生活出来、かつ傾聴されるということの方がはるかに重要なのです！ 我々の救いは今日ではただ正当な貴族制の内にあるのみです。それは数以外の要素で構成される多数という意味です。もし我々がもっと啓蒙されていたら、もしもパリに歴史に明るい人々が沢山住んでいたら、我々はガンベッタをも、プロシアをも、コミューヌをも堪え忍ばずに済んだでしょう。」<sup>(176)</sup>

「重要なことは常に同じ少数の精神が、炬火を伝え合って行くことなのです。中国風の官吏の前に人々が頭を下げない間は、科学アカデミーが法王に代るまでは、すべての政治も社会もその根幹に到るまで、へどが出るような空言の堆積にすぎぬでしょう。」<sup>(177)</sup>

「救済とか、人道主義とか、感情とか理想とかは、もはや我々を十分陋劣に翻弄したのです。今では「法学」と「科学」とを試みるべき時なのです。もしフランスが近い将来に批判の時代に入らなかったら、私はもう取り返しがつかぬと思います。……我々に先ず何よりも必要なものは自然な、従って正当な貴族制です。人は頭なしでは何事も出来ません。……群集は、多数は、常に馬鹿なものです。……私は貴女と同様、階級の差別

など信じていません。カースト制度などというものは考古学に属するものです。しかし私は貧者は富者を憎み、富者は貧者を恐れるとは信じています。これは恐らく永遠にそうなのです。両者に愛を説教するのなど無駄なことです。最大の急務は結局に於いて強者である富者を教育することです。先ずブルジョアを啓蒙するがいい。彼等は何も、全く何も知らないのですから。……すべての町や村に一人の、たった一人の、バステリアを読んだブルジョアがいる場合を想像して御覧なさい。そしてこのブルジョアが尊敬されているとして御覧なさい。事態は変って来るでしょう。』<sup>(178)</sup>

「下層民の墮落を口にするのは不公正で偏狭なことです。結局、教養ある階級を啓蒙しなくてはならないのです。頭からお始めなさい。それが一番ひどい病気にかかっているのです。残りはそれに従うでしょう。』<sup>(179)</sup>

大革命を否認し、イギリス流の立憲君主制を理想とするに到ったルナン自身やテーヌの如く、フローベールも又、上流富裕・知識階級、いってみればブルジョア階級の啓蒙・教育、中国風の官吏による高官政治、正当な貴族制、換言すれば少数知的エリート指導による社会の救済という観念に、その政治、政治体制の理想を求めていたのであり、こうした考え方は彼自身全く意識してはいなかったにもせよ、詰まる所サン・シモン思想と同一のものであったのだ。いづれにしても幾多の苦々しい政治的幻滅を味わい、又芸術創造という選ばれた少数者のみが入るを許されるまさに不平等そのものの、同時に十全なる自由が要求される厳しい世界に生き、自ら精神貴族を以て任ずるフローベールは、彼なりの一種の独裁制の希求に、彼自身の存在の抛り所とその救いをも求めたといえようか。

けれども彼はこの理想に安住の地は遂に見い出せはしなかった。1875年、G・サンドにこう訴えている。

「私には「人生に関する確固たる、又広汎な視野が欠けている。」誠に御もつともです。しかしそうならぬ為にはどうしたらいいのです？ 貴女に御尋ねします。貴女の形而上学を以ては私の暗黒も、人々の暗黒も照らすことは出来ません。一方では宗教、又はカトリック教、という言葉も、又他方、進歩、博愛、民主主義という言葉も、もはや現在の精神的要求には応える事は出来ません。平等という急進派によって唱えられた全く目新しかったドグマも、生理学と歴史とによって実験的に覆えされました。私は現在新しい原則を打ち立てる手段を見い出すことも、古い原則を尊敬することも出来ません。だから私は、徒らにすべてがそれに帰すべき思想を求めているのです。』<sup>(180)</sup>

「僕はこれほどの嫌悪を以って人間を眺めたことはない。僕の嘔吐で人類を溺死させてしまいたい。』<sup>(181)</sup>と叫び、「人間愚の厭わしさ加減は、私の場合、さながら病気で。病気と言っても未だ言葉が足りません。人間という奴は、ほとんど例外なしに私を絶望させる能力を持っていますよ。私は砂漠の中でなければゆっくり息もつけません。』<sup>(182)</sup>と言わざるを得なかったほど、年毎に募って行く人間嫌い人間不信の中で、晩年のフローベールは次第にニヒリズムの淵へと陥て行く。

「フランスはまるで腐った船のように、静かに沈んで行きます。そして救助の望みは、最も頑強な者にとってすら、幻想にしか思われぬ様になりました。我々が這い廻っている一般の顔廢が、愚劣が、衰耄が如何なるものかを知るためには、ここに、パリに居なくてはなりません。この断末魔の感情が私に浸み透り、私は悲しみの為に斃れそうです。仕事の為に自分を虐んでいない時は、私は自分自身の上に呻いています。これが真

実です。暇な間は、私はただ死んで行った人々のことしか考えません。そして非常に傲慢に聞えるかも知れませんが、誰も私を理解してくれる者はなく、私は別の世界に属しているのです。私と同じ職業の人達は実に私の仕事とは縁遠いのです！」<sup>(183)</sup>

1874年、たった3日間で上演中止のやむなきに到った、彼の唯一の劇作たる痛烈な政治諷刺喜劇『候補者』の失敗後、世間の無理解と嘲り、そして愛姪カロリーヌの夫コマンヴィルの破産、その心痛と全財産を投げ出しての救済・奔走、こうした中でなおかつ善意と理想主義に満ちた『三つの物語』を執筆した、仮りに文学的なものにもせよ、ひとときの救いの時期を除けば、その死に到るまで残された全生命を賭けて未完の大作『ブヴァールとペキュシェ』にひたすら没頭するフローベールは、人間愚の総集成ともいべき『紋切型辞典』を一心不乱に筆写する、まさにあの二人の筆耕の最後の姿そのものであったと言ってよい。

「もはや人生からインクで汚すべき紙の連続の他何も期待していません。まるで何処とも知れぬ所へ行く為に無限の孤独の中を横切っている様な気がします。私自身が砂漠であり、同時に旅人であり、駱駝なのです。」<sup>(184)</sup>

「身体中を走り廻る痛み(走行性痛風というやつです)、どうにもならない憂愁、「何もかも空しい」という気持」<sup>(185)</sup>、自ら「非常識極まる小説」<sup>(186)</sup>と吐き捨てる如く呟かざるを得なかったあの「書きかけの小説に対する大きな疑惑」<sup>(187)</sup>の中で、「確かに断言しますが、現代ではすべての人が、混乱した訳の分らぬものに悩まされています。……私に至っては全く特徴的なヒポコンデリーに襲われています。諦めねばならぬのに、私は諦めないのです。」<sup>(188)</sup>と切々と訴え、「私は自分のことを考えぬ為に出来るだけ仕事をしています。しかし私は実現困難という点で、全く馬鹿馬鹿しい書物を企てているので、自分の無力という感情が、又悲しみを深めます。」<sup>(188)</sup>とその悲壮な心情を吐露するフローベールには、もはやかつて己が自身抱懐した政治理想による救済、否、人をたぶらかす諸々の幻想に基づく政治そのものによる救済などは到底信じ得べからざることだったのである。そしてこうした極根状況にまで追い詰められた彼の目に映るものは、ただ人間の愚劣、無力、人間精神とその営為の空しさのみであり、この痛切な認識に立ち到った時、「『カンディド』末尾の「我等の庭を耕そう」、これこそ最も偉大な道徳訓である」<sup>(189)</sup>と悟った彼のなすべきことはただ一つ、従前通り則を超えずひたすら英雄的な誠実さを以て自己の義務を果すこと、即ち自己の天職に一途に邁進することだけだったのである。

「各人は、[……] 誠実であることだけで満足すればいいのです。つまりそれは自己の義務を果し、隣人の権利を侵害しないという意味であり、そうした時には有徳なあらゆるユートピアもすぐに凌駕されるでしょう。如何なる個人であれすべてが自己の範囲でその持分を果していれば、確かに、理想の社会は現出するはずです。ところで、私は私の範囲内でその職分を果している。私には借りはない。」<sup>(190)</sup>

## 結 論

言うまでもなく、フローベールは何よりも先ず芸術家たらんとしたし、又事実芸術家以外の何者でもあり得なかった。そして彼に与えられた「没個性」(《impersonnalité》)・「無感動」(《impassibilité》)を標榜する「リアリズムの巨匠」、<sup>1</sup>「芸術のための芸術の信奉者」、<sup>2</sup>「クロワッセの苦行僧・隠者」といった呼称や評価は、従来ともすれば現実からの、政治・

社会からの逃避という形でのみ理解され勝ちであった。とりわけ政治に無関心であること、あるいはそのように装うこと、政治を汚濁と考えそこから出来得る限り距離をおき、清浄な芸術の世界に遊ぶといった偽りの教養・文化主義が、戦前はもとより今日なお根強く残っており、問題を十九世紀フランスの主たる文芸思潮——ロマン主義、高踏派、写実主義、自然主義、象徴主義——の移入並びにその理解に限ってみても、これを生み、育てた土壌ともいふべき政治的なものをほとんど捨象した形で、いわばその最終的成果たる美しい花々のみを愛でる「アプレシァション」(《appréciation》)の立場でしか捉え得ない我が国にあっては、一層この傾向が顕著であると言えよう。

勿論、フローベールを含めて二月革命からパリ・コミューヌにかけての時代に生きた作家達が、ゴーティエにせよ、ルコント・ド・リールにせよ、ボードレールにせよ、あるいは又ゴンクール兄弟にせよ、各人の政治参加の度合や置かれた立場、更にはその主義主張等により各々に程度の差はあるにしても、皆一様に政治的幻滅から次第に政治に背を向けて、専ら芸術の純粋性を求め深くその世界に沈潜し、結局象牙の塔に籠っていったことは否定し得ぬ事実ではある。そして理想を持たぬことを理想とした客観的リアリズムの文学主張にしても、専制主義、民主主義、共和主義、社会主義に対する憎悪、あらゆる権力・権威を否認する絶対的懐疑主義、政治的無神論、アナキズムにまで行き着く徹底した個人主義的自由主義、大衆を数量としてのみ見、平等を否定する反俗的・精神的エリート意識に基づく正当な貴族制の希求といったその政治思想にしても、更には究極的に立ち到った人間の愚劣、無力、人間精神の空しさというこの人間不信、ニヒリズムそのものの人間・世界認識も、皆こうした政治的、社会的ないしは精神的状況の中で生れ来たったものであった。しかもナポレオン三世の従妹マチルド公妃の文芸サロンの常連であり、皇帝その人を「イジドル」とか「バダング」とかいう侮蔑的な渾名で呼んではいたにしても、必ずしもこの皇帝を嫌ってはいなかった彼は、政治的に見れば結局オールド・リベラリスト＝ブルジョアの保守主義者と断言し得る。しかしながら彼の政治思想を単に疎外されたプチ・ブルジョアないしはブルジョア作家の思想として図式的、形式的に捉えること、ましてや日本的ロマン主義、高踏派、写実主義、自然主義、象徴主義あるいは芸術至上主義的教養・文化主義の水準と、直ちに短絡的に同一化することは決して許されるべきではないのである。

元来フランスの文化は、そしてフランスのいわゆる《écrivains》は、一般的に言って、政治に強い関心を有することがその大きな特徴であり、それが一つの偉大な伝統であると言ってよい。その政治的主張や立場の相違は別として、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、あるいはディドロを始めとする百科全書派の人々、そしてこの啓蒙主義の伝統、更にフローベールが生きた世紀に入ってはシャトブリアン、ラマルティエヌ、ユゴー、サンド、ゾラ等の名を想起するだけで、この事は容易に首肯されよう。ただフローベールは、それなりに共感を有してはいたけれども文学的、政治的立場を異にした敬愛する二人の師、ユゴーやサンド——前者の「政治熱には胸をむかつかせ」<sup>(191)</sup>、「カトリック社会主義者の道楽者や福音主義哲学屋の蛆虫どものために書いた本」<sup>(192)</sup>『レ・ミゼラブル』にあっては、「社会主義者もどきの口吻を弄して」<sup>(192)</sup>、余りに社会主義、理想的人道主義の政治見解を直接的に表明しすぎると思えたし、後者が「社会主義の十八番を振り廻す」<sup>(193)</sup>ことには閉口していたけれども——あるいはラマルティエヌ——「不毛でひからびた種族」<sup>(194)</sup>と切って捨てているとしても——こうしたその旗色を鮮明にし積極的に政治に参加した先輩作家達の様には、リベラリス

ト・ミリタンとはなり得なかったし、結局それは又彼の役割ではなかったのだ。しかしフローベルは決して象牙の塔に座し、時折疲れた目を上げて、その窓から外界をぼんやりと眺める単なる傍観者ではない。彼は少くとも自己の範囲内で、真摯に政治を見つめ、思考し、彼なりに知的エリートとしての社会的責務を果していたのであり、その非政治的姿勢の裏には常に強い政治的問題意識を持ち続けていたのである。従ってあの文学一途の精進にしても、必ずしも政治・人生からの現実逃避のみを意味するものではなく、彼自身も又やはりフランスの偉大な文化的伝統の中にいたのであった。確かに政治思想ないしは政治史的に見れば、その思想の限界は自ら明らかであり、独創的・革新的とはおよそ言い難い、矛盾と混乱に満ちたものではあったけれども、しかしあれほどまでの政治への誠実な取り組みの内にある強靱な精神とフランスの伝統の重さを思う時、改めて目を開かれる思いがする。

同時にこのことは又、既に序論でも述べた如く、彼の諸作品とりわけ『ボヴァリー夫人』、『感情教育』、『ブヴァールとベキュシェ』といった小説、更には政治諷刺喜劇『候補者』等に新しい視点を与え、新たな角度からの読み直しに我々を導くように思われる。そしてこれこそが、我々が解明すべき今後の大きな課題の一つであるだろう。

## 注

- (1) Correspondance, Conard, t. III, pp. 61-62. (à Louise Colet, [9 décembre 1852])
- (2) Ibid., t. II, p. 239. (à Louis Bouilhet, 4 septembre 1850)
- (3) Cf. par exemple, *ibid.*, t. VI, pp. 8-9. (à George Sand, 2 février 1869)
- (4) Ibid., t. III, p. 183. (à L. Colet, [26-27 avril 1853])
- (5) Ibid., t. IV, pp. 181 et 183. (à M<sup>lle</sup> Leroyer de Chantepie, 18 mai [1857])
- (6) Ibid., t. VI, p. 31. (à G. Sand, fin juin 1869)
- (7) Ibid., t. IV, pp. 170-171. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, [30 mars 1857])
- (8) Cf. par exemple, *ibid.*, t. VII, p. 282. (à G. Sand, [décembre 1875, après le 20])
- (9) Ibid., t. VI, p. 202. (à la même, 11 mars 1871)
- (10) Ibid., t. VI, p. 203. (à la même, 11 mars 1871)
- (11) Ibid., t. III, pp. 54-55. (à L. Colet, [22 novembre 1852])
- (12) Ibid., t. I, p. 269. (à la même, [26 août 1846])
- (13) Ibid., t. I, p. 225. (à la même, [8 août 1846])
- (14) Ibid., t. VIII, p. 45. (à Leconte de Lisle, [30 mai 1877])
- (15) Ibid., t. VIII, p. 311. (à M<sup>me</sup> Roger des Genettes, [première quinzaine d'octobre 1879])
- (16) Ibid., t. I, p. 225. (à L. Colet, [8 août 1846])
- (17) Ibid., t. III, p. 58. (à la même, [9 décembre 1852])
- (18) Ibid., t. III, p. 337. (à la même, [7 septembre 1853])
- (19) Ibid., t. IV, p. 17. (à la même, [janvier 1854])
- (20) Ibid., t. IV, p. 170. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, [30 mars 1857])
- (21) Ibid., t. III, p. 59. (à L. Colet, [9 décembre 1852])
- (22) Ibid., t. III, pp. 415-416. (à la même, [28 décembre 1853])
- (23) Ibid., supplément, t. IV, p. 66. (à Edmond Laporte, [18 avril 1878])
- (24) Ibid., t. VIII, p. 335. (à sa nièce Caroline, [16 décembre 1879])
- (25) Ibid., t. VIII, p. 385. (à Guy de Maupassant, 13 février 1880)

- (26) Ibid., t. I, p. 225. (à L. Colet, [8 août 1846])
- (27) Ibid., t. II, p. 238. (à L. Bouilhet, 4 septembre 1850)
- (28) Ibid., t. II, p. 414. (à L. Colet, [15-16 mai 1852])
- (29) Ibid., t. III, p. 67. (à la même, [17 décembre 1852])
- (30) Ibid., t. III, p. 208. (à la même, [26-27 mai 1853])
- (31) Ibid., t. IV, p. 33. (à la même, [2-3 mars 1854])
- (32) Ibid., t. V, p. 146. (à M<sup>lle</sup> Amélie Bosquet, [juillet 1864])
- (33) Ibid., t. V, p. 385. (à G. Sand, 5 juillet 1868)
- (34) Ibid., t. V, p. 352. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 24 janvier 1868)
- (35) Ibid., t. V, p. 407. (à G. Sand, [fin septembre 1868])
- (36) Ibid., t. VI, p. 10. (à Michelet, 2 février 1869)
- (37) Ibid., t. V, p. 149. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, [été 1864])
- (38) Ibid., t. VII, p. 108. (à G. Sand, [30 décembre 1873])
- (39) Ibid., t. V, p. 149. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, [été 1864])
- (40) Ibid., t. V, p. 344. (à Jules Duplan, [15 décembre 1867])
- (41) Ibid., t. V, pp. 348-349. (à M<sup>lle</sup> A. Bosquet, [fin décembre 1867])
- (42) Cf. Edmund Wilson, *The Politics of Flaubert, The Triple Thinkers*, 1938.
- (43) Corr., t. VI, p. 287. (à G. Sand, [4 ou 5 octobre 1871])
- (44) Ibid., t. V, p. 197. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 23 janvier 1866)
- (45) Ibid., t. VI, p. 228. (à G. Sand, [29 avril 1871])
- (46) Ibid., t. VI, p. 281. (à la même, 8 septembre 1871)
- (47) Ibid., t. VI, p. 286. (à la même, [4 ou 5 octobre 1871])
- (48) Ibid., t. II, p. 415. (à L. Colet, [15-16 mai 1852])
- (49) Ibid., t. VII, p. 282. (à G. Sand, [décembre 1875, après le 20])
- (50) Ibid., t. III, pp. 349-350. (à L. Colet, [1853])
- (51) Ibid., t. IV, p. 185. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 18 mai [1857])
- (52) Ibid., supp., t. III, p. 242. (à M<sup>me</sup> Brainne, 18 [février 1876])
- (53) Ibid., t. III, p. 17. (à L. Colet, [4 septembre 1852])
- (54) Ibid., t. V, p. 308. (à G. Sand, [vers le 15 juin 1867])
- (55) Ibid., t. VII, p. 342. (à Sa nièce Caroline, [17 août 1876])
- (56) Ibid., t. III, p. 178. (à L. Colet, [22 avril 1853])
- (57) Ibid., t. VI, p. 227. (à G. Sand, [29 avril 1871])
- (58) Ibid., t. VI, p. 265. (à la même, 25 juillet 1871)
- (59) Ibid., t. VI, pp. 281-282. (à la même, 8 septembre 1871)
- (60) Ibid., t. VI, p. 31. (à la même, [fin juin 1869])
- (61) Ibid., supp., t. III, p. 168. (à M<sup>me</sup> Brainne, [25 février 1875])
- (62) Ibid., t. III, pp. 66-67. (à L. Colet, [17 décembre 1852])
- (63) Ibid., t. III, p. 211. (à la même, [26-27 mai 1853])
- (64) Ibid., t. IV, p. 14. (à la même, [janvier 1854])
- (65) Ibid., t. IV, p. 21. (à la même, [29 janvier 1854])
- (66) Ibid., supp., t. II, p. 88. (à Hippolyte Taine, [fin novembre 1866])
- (67) Ibid., t. VI, p. 287. (à G. Sand, [4 ou 5 octobre 1871])
- (68) Ibid., supp., t. II, p. 259. (à Raoul-Duval, [7 février 1871])

- (69) Ibid., t. VII, p. 326. (à Émile Zola, [23 juillet 1876])
- (70) Ibid., t. V, p. 152. (à M<sup>lle</sup> A. Bosquet, [9 août 1864])
- (71) Ibid., t. V, p. 335. (à Michelet, [12 novembre 1867])
- (72) Ibid., t. VI, p. 227. (à G. Sand, [29 avril 1871])
- (73) Ibid., t. VII, p. 298. (à Ernest Renan, [du 19 au 26 mai 1876])
- (74) Ibid., t. VII, p. 349. (à La Princesse Mathilde, [19 septembre 1876])
- (75) Ibid., t. VII, p. 282. (à G. Sand, [décembre 1875, après le 20])
- (76) Ibid., t. IV, pp. 184-185. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 18 mai [1857])
- (77) Ibid., t. VI, p. 282. (à G. Sand, 8 septembre 1871)
- (78) Ibid., t. VI pp. 286-287. (à la même, [4 ou 5 octobre 1871])
- (79) Ibid., t. II, p. 415. (à L. Colet, [15-16 mai 1852])
- (80) Ibid., t. VI, p. 33. (à G. Sand, [fin juin-début juillet 1869])
- (81) Ibid., t. VI, p. 138. (à la même, 3 août 1870)
- (82) Ibid., supp., t. III, p. 68. (à La Baronne Lepic(?), [novembre-décembre 1872])
- (83) Ibid., t. VI, p. 228. (à G. Sand, [29 avril 1871])
- (84) Ibid., t. VI, p. 353. (à la même, [entre le 20 et le 28 février 1872])
- (85) Ibid., t. VI, p. 282. (à la même, 8 septembre 1871)
- (86) Ibid., t. VI, p. 297. (à la même, [avant le 18 octobre 1871])
- (87) Ibid., t. II, p. 415. (à L. Colet, [15-16 mai 1852])
- (88) Ibid., t. VI, pp. 32-33. (à G. Sand, [fin juin-début juillet 1869])
- (89) ナポレオン三世の渾名。後出の「イジドール」も同じ。
- (90) Corr., t. IV, pp. 33-34. (à L. Colet, [2-3 mars 1854])
- (91) Ibid., t. VI, p. 287. (à G. Sand, [4 ou 5 octobre 1871])
- (92) Ibid., t. VII, p. 10. (à M<sup>me</sup> Gustave de Maupassant, 23 février 1873)
- (93) Ibid., t. I, p. 1. (à Ernest Chevalier, [31 décembre 1830])
- (94) Ibid., t. I, p. 11. (au même, 11 septembre 1833)
- (95) Ibid., t. I, p. 250. (à L. Colet, [12 août 1846])
- (96) Ibid., t. I, pp. 21-22. (à E. Cheralier, 14 août 1835)
- (97) Ibid., t. I, p. 23. (au même, 24 août 1835)
- (98) Cf. Gustave Flaubert, Souvenirs, notes et pensées intimes, Buchet/Chastel, Paris, 1965.
- (99) Corr. t. I, p. 99. (à E. Chevalier, [15 mars 1842])
- (100) Ibid., t. I, p. 133. (à sa sœur, [fin mars 1843])
- (101) Ibid., supp., t. I, p. 37. (à la même, [20 décembre 1843])
- (102) Ibid., t. I, p. 185. (à Alfred Le Poittevin, [fin juin-début juillet 1845])
- (103) Ibid., t. I, p. 194. (à Achille Flaubert, 26 [septembre 1845])
- (104) Ibid., t. III, p. 150. (à L. Colet, [31 mars 1853])
- (105) Ibid., t. I, p. 225. (à la même, [8 août 1846])
- (106) Ibid., t. I, p. 269. (à la même, [26 août 1846])
- (107) Ibid., t. II, p. 78. (à la même, [fin décembre 1847])
- (108) Correspondance, Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Conard. による。
- (109) Corr. t. II, p. 80. (à L. Colet, [mars 1848])
- (110) Ibid., t. II, p. 84. (à E. Chevalier, 10 [avril 1848])
- (111) Ibid., t. V, p. 158. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 16 octobre 1864)

- (112) L'Éducation Sentimentale, Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Conard, p. 425.
- (113) Ibid., p. 521.
- (114) Ibid., p. 542.
- (115) Ibid., p. 342.
- (116) Ibid., p. 529.
- (117) Corr., t. II, p. 238. (à L. Bouilhet, 4 septembre 1850)
- (118) Ibid., t. III, p. 178. (à L. Colet, [22 avril 1853])
- (119) Ibid., t. IV, p. 34. (à la même, [2-3 mars 1854])
- (120) Henri Guillemin, Flaubert Devant La Vie et Devant Dieu, La Renaissance du Livre, Bruxelles, 1963, pp. 71-72.
- (121) Corr., t. III, p. 349. (à L. Colet, [1853])
- (122) Caroline Commanville, Souvenirs Intimes, publiés, en tête de la Correspondance de Flaubert, Charpentier, 1887. et reproduits, en tête de la Correspondance de Flaubert tome I, Conard, pp. XXXIV-XXXV.
- (123) Corr. t. VI, p. 142. (à G. Sand, [17 août 1870])
- (124) Correspondance entre George Sand et Gustave Flaubert, Calmann Lévy, [11 (?) septembre 1870]
- (125) Corr., t. VI, p. 147. (à G. Sand, [10 septembre 1870])
- (126) Ibid., t. VI, p. 151. (à la même, [milieu de septembre 1870])
- (127) Ibid., t. VI, p. 148. (à la même, [10 septembre 1870])
- (128) Ibid., t. VI, pp. 164-165. (à la même, 11 octobre 1870)
- (129) Correspondance entre G. Sand et G. Flaubert, [11 (?) septembre 1870]
- (130) Corr., t. VI, pp. 216-217. (à G. Sand, 31 mars 1871)
- (131) Ibid., t. VI, p. 224. (à la même, [24 avril 1871])
- なお「リーグ」とは、1576年ギーズ公によって組織されたカトリック同盟のこと。その企図はカルヴィン派に対してカトリック教を擁護すること、そして当然の結果として、アンリー三世を倒し盟主ギーズ家を王位につけることであった。
- 又「マイヨットン」とは、シャルル六世治下の1382年、反乱を起したパリ市民に与えられた名称。兵器廠から奪ったマイエという槌に似た武器を持って戦ったことからその名は由来。
- (132) Ibid., t. VI, p. 228. (à la même, [29 avril 1871])
- (133) Ibid., t. VI, p. 248. (à la même, [11 juin 1871])
- (134) Ibid., t. VI, p. 227. (à la même, [29 avril 1871])
- (135) Ibid., t. VI, p. 276. (à la même, 6 septembre [1871])
- (136) Ibid., t. VI, pp. 296-297. (à la même, [avant le 18 octobre 1871])
- (137) Ibid., t. VI, pp. 227-228. (à la même, [29 avril 1871])
- (138) Ibid., t. VII, p. 3. (à M<sup>me</sup> Régnier, [janvier 1873])
- (139) Ibid., t. VI, p. 224. (à G. Sand, [24 avril 1871])
- (140) Ibid., t. VI, p. 216. (à la même, 31 mars 1871)
- (141) C. Commanville, op. cit., p. XVII.
- (142) Maurice Nadeau, Gustave Flaubert écrivain, Denoël, Paris, 1969, pp. 225-226.
- (143) Corr., t. V, p. 300. (à G. Sand, [mai 1867])
- (144) Ibid., t. III, p. 150. (à L. Colet, [31 mars 1853])

同時期に彼は更に次の様に言明しているが、こうした考え方が後述する「正当な貴族制」という



彼の政治理想につながっていくのである。

「僕は貴族主義者に、熱烈な貴族主義者になりました。……僕は我が同胞達を唾棄しており、自分が彼等の同胞であるとは感じません。」(Ibid., t. III, p. 209. (à la même, [26-27 mai 1853]))

(145) Ibid., t. I, p. 354. (à la même, [4 octobre 1846])

(146) Ibid., t. III, p. 305. (à la même, [21 et 22 août 1853])

(147) Ibid., supp., t. I, p. 219. (à Champfleury, [4 février? 1857])

(148) Ibid., t. IV, pp. 141-142. (à son frère Achille, [3 janvier 1857])

なお、同じ年に同じ罪状で相次いで起訴された『ボヴァリー夫人』と『悪の華』が、結局一方は無罪他方は有罪という結果になった大きな理由の一つに、政治的裏工作の差もあげられよう。とりわけ前者の勝訴には、皇后ウージェーヌの口添えがあったとも言われている。付言すれば、後者の判決は実に92年後の1949年に取り消されている。

(149) Ibid., t. V, pp. 123-124. (à sa nièce Caroline, [fin de décembre 1863])

なお C\*\*\*氏とは、大材木商エルネスト・コマンヴィルのこと。カロリーヌとの結婚は1864年4月6日。

(150) Ibid., t. VI, p. 27. (à la même, 19 juin, 1869)

(151) Ibid., t. VII, p. 83. (à la même, 14 octobre 1869)

(152) Ibid., t. V, p. 238. (à G. Sand, [fin septembre 1866])

(153) Ibid., t. VI, p. 282. (à la même, 8 septembre 1871)

(154) Ibid., t. VI, p. 307. (à la même, 14 novembre [1871])

(155) Ibid., t. VI, p. 307. (à la même, 14 novembre [1871])

(156) Ibid., t. VII, p. 146. (à La P. Mathilde, [8 juin 1874])

(157) Ibid., t. VII, p. 207. (à G. Sand, 26 septembre 1874)

(158) Ibid., supp., t. III, p. 146. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, 26 septembre [1874])

(159) Ibid., t. VIII, p. 6. (à sa nièce Caroline, [12 janvier 1877])

(160) Ibid., supp., t. IV, pp. 93-94. (à M<sup>me</sup> Brainne, [9 juillet 1878])

(161) Auguste Sabatier, L'Œuvre posthume de Flaubert, Journal de Genève, 3 avril 1881. (cité dans l'édition Cento, LVI)

(162) Corr., supp., t. IV, p. 170. (à Raoul-Duval, [mi-février 1879])

(163) Ibid., t. VIII, p. 400. (à G. de Maupassant, 19 [16] février 1880)

(164) Bouvard et Pécuchet, Œuvres Complètes de Gustave Flaubert, Conard, p. 226.

(165) Cf. Corr., t. II, p. 360. (à L. Colet, [25 janvier 1852]; t. IV, pp. 182-183. (à M<sup>lle</sup> L. de Chantepie, 18 mai [1857]), etc.

(166) Ibid., t. VI, pp. 32-33. (à G. Sand, [fin juin-début juillet 1869])

(167) Ibid., t. VI, p. 243. (à Charles Lapierre, 27 mai [1871])

(168) Ibid., supp., t. IV, pp. 104-105. (à M<sup>me</sup> Brainne, 15 août [1878])

(169) Ibid., t. VI, p. 215. (à G. Sand, 31 mars 1871)

(170) Ibid., t. VI, p. 281. (à la même, 8 septembre 1871)

(171) Ibid., t. VI, p. 264. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, [juillet 1871])

(172) Ibid., t. VI, p. 265. (à G. Sand 25 juillet 1871)

(173) Ibid., t. VI, p. 288. (à la même, [4 ou 5 octobre 1871])

(174) L'Éducation Sentimentale, p. 530.

(175) Corr., t. VI, p. 138. (à G. Sand, 3 août 1870)

- (176) Ibid., t. VI, p. 228. (à la même, [29 avril]1871))  
 (177) Ibid., t. VI, p. 281. (à la même, 8 septembre 1871)  
 (178) Ibid., t. VI, pp. 286-288. (à la même, [4 ou 5 octobre 1871])  
 (179) Ibid., t. VI, p. 307. (à la même, 14 novembre [1871])  
 (180) Ibid., t. VII, p. 282. (à la même, [décembre 1875, après le 20])  
 (181) Ibid., t. VI, p. 258. (à Ernest Feydeau, [29 juin 1871])  
 (182) Ibid., t. VIII, p. 357. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, [25 janvier 1880])  
 (183) Ibid., t. VII, p. 224. (à G. Sand, 2 décembre 1874)  
 (184) Ibid., t. VII, p. 235. (à la même, [27 mars 1875])  
 (185) Ibid., t. VII, p. 239. (à la même, [10 mai 1875])  
 (186) Ibid., t. VII, p. 234. (à la même, [27 mars 1875])  
 (187) Ibid., t. VII, p. 239. (à la même, [10 mai 1875])  
 (188) Ibid., t. VII, p. 229. (à la même, [décembre 1874])  
 (189) Ibid., t. VII, p. 203. (à Edmond de Goncourt, 22 [septembre 1874])  
 (190) Ibid., t. III, p. 275. (à L. Colet, [12 juillet 1853])

生涯を貫く彼の思想の根幹をなすこうした考え方は、同時期の他の書簡の中にも見いだされる。「自分自身でありましょう。生粋の自分自身でありましょう。「君の務めは何か？ 日々の要求に応えることだ。」これはゲーテの思想です。僕等の務めを果す、即ち、よく書くことに励みましょう。ただ各自が自分の務めを果していさえすれば、聖人の社会は現出するはずですよ！」(Ibid., t. III, p. 184. (à la même, [26-27 avril 1853]))

- (191) Ibid., supp., t. III, p. 229. (à M<sup>me</sup> Brainne, 9 décembre [1875])  
 (192) Ibid., t. V, p. 35. (à M<sup>me</sup> R. des Genettes, [juillet 1862])  
 (193) Ibid., t. V, p. 246. (à la même, [12 novembre 1866])  
 (194) Ibid., t. III, p. 178. (à L. Colet, [22 avril 1853])

なお本論文の引用文のうち原著の邦訳があるものは、参照あるいは借用させていただいた。以下に一括して掲げておく。

- (1) フロオベール全集 第七巻・第八巻(書簡I・II), 鈴木健郎他訳, 改造社。
- (2) ジョルジュ・サンドへの書簡, 中村光夫訳, 創元社。
- (3) フロベール書簡集 Ⅲ, 鈴木健郎他訳, 白水社。
- (4) フローベール全集, 生島遠一他訳, 筑摩書房。

## Sommaire

**Idées Politiques de Gustave Flaubert**  
—Étude Analytique d'après sa Correspondance—

Hisashi TAKIZAWA

Jusqu'à présent, on a considéré Flaubert comme «l'ascète ou l'ermite de Croisset» et comme un des grands partisans de «l'Art pour l'Art», ce qui a déterminé ses estimations générales, soit approbatives, soit négatives.

Certes, il est indéniable que Flaubert a été un écrivain fort apolitique. Toutefois, lui qui devait traverser les temps troublés subissant une grande variété de régimes, il ne se renfermait pas toujours dans sa tour d'ivoire, mais plutôt s'intéressait beaucoup à la politique actuelle. C'est un fait que ses œuvres sont riches de considérations et de commentaires judicieux sur cette question sous le couvert de «l'impersonnalité» et de «l'impassibilité». La raison pour laquelle il semble exceller sur ses contemporains plus ou moins apolitiques, c'est son attitude sérieuse pour les conditions et la destinée humaines.

En analysant sa correspondance de ce point de vue, nous sommes parvenus à élucider d'une manière globale ses idées politiques. Elles seraient formulées comme ce qui suit :

- A. Son Credo
  - 1). Liberté
  - 2). Justice
- B. Ses haines, son mépris, son hostilité
  - 1). Égalité
  - 2). Pouvoir, Autorité
  - 3). Tyrannies, Despotisme
  - 4). Socialisme
  - 5). République
  - 6). Démocratie (suffrage universel ; bourgeois, foule, etc.)
- C. Son idéal
  - 1). Science politique
  - 2). Aristocratie légitime, mandarins
- D. Anarchisme nihiliste, Athéisme politique malgré son idéal

Il est vrai que ses idées politiques peu originales et assez contradictoires sont essentiellement pessimistes et ont évidemment leurs limites, et qu'elles se réduiraient à celles de la bourgeoisie conservatrice comme de l'aristocratie de l'esprit ; toujours

est-il qu'il pensait, se débattait sincèrement avec la politique comme «un libéral enragé». Bien que ce ne fût pas son rôle d'être un militant, il a été, tout compte fait, un ferme défenseur de la Liberté, un ennemi de toute oppression aussi bien qu'un honnête témoin très observateur ou un honnête commentateur très juste de son époque. Si la première condition nécessaire du grand artiste est avant tout d'être honnête et libéral, c'est en cela que sa grandeur consiste.

Ajoutons que la présente étude nous permettrait d'éclaircir non seulement ses pensées politiques, mais aussi le mystère de sa création littéraire sous un nouvel aspect. C'est ce problème-là que nous devrions envisager.